

キャロライン妃の大陸旅行とミラノ委員会

古 賀 秀 男

はじめに

ナポレオンによる戦乱が終結した一八一四年七月二五日、イギリス皇太子妃キャロラインは首相リヴァプール宛に次のような手紙を送った。それは長年にわたって奪われてきた摂政殿下ジョージ（夫）と彼女の間の平和を取り戻すために、また世継ぎの娘シャーロットがオラニエ公嗣子との縁談を断った理由の一つに母親の現在の不安定な状態があり、その障害を解消させるために、イングランドから出国し故郷の弟ブラウンシュヴァイク公のもとを訪ね、さらに大陸を旅行する決心をしたと述べ、さらにこのほど議会が彼女への供与を認めた年間五万ポンドの歳費は返上し、従来の三万五千ポンドを受け取ることや、現在の住居の後始末についても言及していた。⁽¹⁾ リヴァプールは七月二八日付の返信で、手紙を摂政殿下に見せたところ、殿下は皇太子妃が出国し実家のブラウンシュヴァイクを訪ねるほか、自分が気に入った所に旅行し住居を構えることに異存はない、またシャーロット妃とオラニエ公嗣子との縁組が破談になったのは皇太子妃のせいではない、またケンジントン・パレスの妃用の居室は現状のままにしておいて差し支えない、との意向であったと書き送った。⁽²⁾

返信を見て小躍りしたキャロラインは、ジュネーヴ滞在中の元女官レイディ・シャーロット・キャムベル（のち旅行中にしばらく妃の女官を務める）宛に、「終わり良ければすべて良し、好きなどころで誰とでも会えるようになる、私は本当に幸せ」と書いた。⁽³⁾ すでに出国の準備を整え、二五日にはロンドンの住居コーンノートハウスを引き払っていたキャロラインは、八月九日サセックス州ワーシングからフリゲート艦ジェイスンでドイツに向けて出国した。同行者は侍女、侍従、召使いなど十人ほどであった。⁽⁴⁾ 一七九五年四月に従兄のジョージのもとに嫁いだから一九年余りの歳月が流れ、彼女はすでに四六歳であった。

キャロラインはなぜ出国を決意するにいたったのか。それは幸せな出国だったのか。さきの首相宛の手紙と同時に、彼女は親しい支援者で歳費増額にも尽力した野党ホイッグ系議員ホイットブレッド宛にも、出国の決意を伝える別れの手紙を送っていた。彼女はそのなかで彼と同僚議員ヘンリ・ブルームに、これまでの暖かい支援に感謝の言葉を述べた後、出国の理由をさらに突っ込んで次のように書いた。「感受性と誇りをもっている人なら誰も、『現在の私のような』皇太子妃としての地位をないがしろにされる境遇に永く耐えていくことは

できません。また一人の私人としても、公私いずれの場にも私が姿を見せるのは我慢できないと言われており、それほど君主「夫」から嫌われているのです。皇太子妃としてそのような不名誉と屈辱に耐えることはできません。摂政殿下とその同族が、「一八〇五年以来」敵対者や裏切り者たちの間違った非難にそって、私に対する不義の罪などまったく濡れ衣であることは内閣と議会が公認しているにもかかわらず、私を罪人扱いしていることにももう耐えることはできません」⁽⁵⁾と。ホイットブレッドは妃の決断を聞いて驚きはしないが、妃を囲む暖かい社交の場が失われるのは大きな苦痛だと答えた。⁽⁶⁾

この年六月には対ナポレオン戦争の勝利を祝ってロシア皇帝、プロイセン王ほか列国の君主、指導者がロンドンに集まったが、キャロラインは夫と王妃から宮殿応接室への立ち入りを一切禁じられ、また夫からは公私いずれの場でも二度と会わないと申し渡されていた。⁽⁷⁾さきのリヴァプールの書簡では列国の君主らが妃を訪問することに摂政殿下は何の妨害もしなかったが、彼らの方が訪問せずに帰国した、という夫の釈明が書かれていた。⁽²⁾このようにのけ者として厄介払いされてきたキャロラインが、イギリス王室とこの国を捨てる気持ちになっただけに踏み切ったのであった。

だが彼女は夫がジョージ四世として即位したのち、住み着いていたイタリアからほぼ六年ぶりに帰国した。それゆえ「出国」は結果として長期の大陸旅行となったのだが、なぜ彼女は帰国を決意し、実際に帰国することになったのか。彼女は出国の際「虐げられた」(injured)皇太子妃の屈辱としがらみから解放されると小躍りしたが、その判断

は甘すぎた。摂政側は彼女を厄介払いした上で、その身边にスパイを送り込んで私生活を偵察させ、離婚のための口実を探し求めている。偵察活動は、イギリスから同行したキャロラインの侍従、侍女たちが相次いで帰国し、その代わりを現地で採用し始めた時期から活発になる。やがてキャロラインが、従者として雇い入れた元軍人のイタリア人バルトロメオ・ベルガミ(またはベルガミ Bartolomeo Pergami, Bergani)と親しくなったとの噂が広がる。離婚の口実をつかみたい摂政は、一八一八年には法律家をミラノに派遣し、外国滞在中のキャロラインの「不義」をあばく目的で内密に調査させることにした。当時キャロラインはアドリア海岸ペーザロ近郊に住居をおいていたが、このミラノの動きを伝え聞いてオーストリア政府に止めさせるよう請願も送った。⁽⁸⁾この内密の調査が彼女の関心をイギリスへ引き戻し、やがて帰国を決意させるのに大いにかかわることになった。

本稿の主題の一つミラノ委員会(Milan Commission)は、一八年八月このようにして生まれた。委員会はイギリスから派遣した二人の弁護士とウィーンのイギリス大使館付き武官の三人からなり、それにイタリア人弁護士一人を加え、ミラノに事務所をおき、六ヶ月にわたってキャロラインの元侍女、従者や出入りの職人(すべてイタリア人、スイス人からなる)などを証人喚問し、大量の尋問調書と報告を作成し「緑の袋」(Green Bag)に入れて持ち帰った。この書類が基礎となって一八二〇年、「王妃に対する刑罰法案」(The Bill of Pains and Penalties against Her Majesty)すなわち「キャロライン・アメリカ・エリザベス王妃からこの王国の王妃としての肩書き、大権、権利、特権及び免除特権を剝奪し、国王とキャロライン・アメ

リア・エリザベスの結婚を解消させるための法律」を貴族院に提出し、採択させようとする、イギリス議会史に汚点を残す「裁判」(trial)が行われたのである。⁽⁹⁾

ミラノ委員会の活動とその調査・報告は、それゆえ「裁判」の詳細を記録した議会討議録や『タイムズ』の記事以上に、その原典に当たるものとしてキャロライン王妃事件の核心を語るきわめて重要な史料である。それゆえこの事件を扱う研究者は同委員会に大きな関心を寄せ、通常の場合、貴族院における「裁判」との関連で論究されてきた。研究史の冒頭に位置するイタリア人研究者クレルチ『分別のない王妃——イギリス王妃ブラウンシュヴァイクのキャロラインの悲劇』(イタリア語版一九〇四年、英訳版一九〇七年)は、いくつかの明らかな誤りを含んでいるが、イタリア側の史料調査に重みがあり、イタリアにおける彼女の足跡やペルガミの晩年など、本書によって初めて明るみに出たことも少なくない。しかしシャロット妃をキャロラインの私生児とするなど、偏見に取りつかれた大きな誤りがあり、全体のバランスも欠けている。⁽¹⁰⁾クレルチを意識したメルヴィルによる二巻本の大著『虐げられた王妃——ブランドウィックのキャロライン』(一九一二年)は、全巻を書簡史料で詳細に語らせており、参照すべき箇所が多く史料価値がきわめて高い。⁽¹¹⁾ただ、ひたすら書簡で語らせただけに、抜け落ちた空隙があるのは事実である。パリーによる『キャロライン王妃伝』(一九三〇年)が、ミラノ委員会に先立つオムブテード男爵らによるスパイ行動を重視し、「ミラノ委員会の完全な歴史はまだ書かれていない」と述べたのは正鵠を射た主張と言える。⁽¹²⁾

その後刊行されたキャロラインの評伝、研究書は枚挙にいとまないほどだが、妃の旅行と大陸在住時とミラノ委員会に関する研究には深化が見られなかった。⁽¹³⁾その間に上梓されたアスピノール編の皇太子ジョージ及びジョージ四世の書簡集計一一巻は、ミラノ委員会に関連する書簡やメモも相当数収録しており、実態の解明に少なからぬ貢献をした。⁽¹⁴⁾その水準を大幅に引き上げたのは、フレイザーの新著『御したい王妃——キャロライン王妃の生涯』であり、ウィンザー王室文書館の所蔵史料を駆使して、「悩み苦しんだ王妃と彼女を悩ませた人について、率直ではあるが同情を込めた肖像」を描き出した。⁽¹⁵⁾だがこの新著でも、ミラノ委員会の調査に関する比重のおき方、及びその前提となるオムブテード男爵らによるスパイ活動についての分析・論述は不十分であり、とくに反王妃側の重要証人となる召使いサッキとデュモンが、敬愛していた女主人を裏切ったなぜ証言するに至ったのか、は何ら解明していない。サッキとデュモンの問題は、王室文書館所蔵の王妃側史料の検証によって本稿が初めて明るみに出すことになるが、この検証がなければ彼らの証言を信用するほかないであろう。N・スウィートは最新の論文で「王妃の裁判に連なっていく秘密の活動の物語は、大部分はまだ語られていない」と言い切っている。もっともスウィートが明らかにしたのは、ミラノ委員会の一人ブラウン大佐にかかわることのみであった。⁽¹⁶⁾

本稿では、大陸旅行の初期からのキャロラインに対する身辺調査の実態と、ミラノ委員会とその証人たちの実状を具体的に確認しながら、キャロライン王妃事件の前提になる「不義」「密通」がいかなる実態のものであったか、その根拠となる証言がいかに虚構性をもつ

窓のであったか、を可能な限り明らかにしてみたい。

史

一 キャロライン妃の大陸旅行と従者たち

1 ブラウンシュヴァイクからイタリアへ—イギリスへの想い、ペルガミとの出会い

キャロラインの出国をめぐる、「虐げられた」状態からの解放という喜びとは裏腹に、深刻な懸念も吹き出していたことにまず注目したい。すでに一八一三年三月以来、キャロラインの支援者ホイットブレッドらは、彼女に対する「不義」の濡れ衣問題（一八〇五—六年）や不相応な処遇の問題を庶民院に公表し、彼女を支援する論議を巻き起こしていたが、⁽¹⁷⁾列国代表が戦勝を祝賀してロンドンに集まった一年六月、キャロラインが摂政に宛てた手紙とその返信に当たる王妃がキャロラインに宛てた手紙を庶民院で公表した。王妃の手紙は、キャロラインの宮殿応接室への立ち入りを禁じる、及び摂政は公私いづれの場合でも彼女とは会わないという、摂政の「確固たる不変の決定」を本人に代わって彼女に伝えたものであった。⁽¹⁸⁾出国の有力な原因の一つが、このような夫と王妃（義母）による冷酷な仕打ちにあったことは、ホイットブレッド宛の前述の手紙で明白である。だがそのホイットブレッドとブルームが、彼女の出国の決心に水を差すような懸念を伝えてきた。

それは次のような警告であった。彼女が長期間イギリスを留守にすれば、摂政が再婚でき、新たな王子を得られるように、摂政と内閣がキャロラインとの離婚を押し進め、シャーロットの王位継承権を剝奪するという問題が起り得る。そうなればイギリスは混乱ないし内乱

におちいり、キャロラインは騒乱の責任を問われることになりかねない、というものであった。すでに出国のためワーシングに滞在していたキャロラインは、与党の有力者キャニング宛にホイットブレッドからの警告の主旨を伝え、自分が身を引いて出国するのは「摂政殿下、シャーロット妃、この国、及び私自身の平和と静穏のため」であり、もしホイットブレッドらが懸念するような事態が起れば、自分と娘の権利を護るため直ちに帰国することになる、この手紙を首相にぜひみせてほしい、と書き送った。⁽¹⁹⁾キャニングの返信では、首相はそのような懸念が現実化するとは考えられないと述べたとし、また必要があればキャロライン妃はいつでも遠慮なく帰国できる、と書かれていた。⁽²⁰⁾この懸念について、キャロラインは出発直前の八月七日、レイディ・キャムベル宛の新たな手紙の末尾に、「私はこの出国のことでホイットブレッドとブルームによってひどく悩まされています。でも他言は無用に」と書き加えた。⁽²¹⁾イギリスに決別しようとしているキャロラインの心の片隅に、もし皇太子妃・王妃の地位が脅かされる事態が生じたときには帰国する、という考えが発案時からあったことに注目しておきたい。

キャロラインが一年八月九日にワーシングを發つたとき、彼女の同伴者は女官のレイディ・シャーロット・リンゼイ（ノース元首相の娘）とレイディ・エリザベス・フォーズ、侍従のサー・ウィリアム・ゲルとアントニー・バトラー・セント・レジャー、侍医のヘンリ・ホランド医師、近習のフィリップ・クレイヴェル、家令のジョン・ジェイコブ・シカード、召使い・小姓のジョン・ヘアロニマスとフィリップ・クラックラー夫妻（ドイツ人）、御者のチャールズ・ハ

ートラス、それに全行程を同行した養子扱いのウィリアム・オースティン少年であった。⁽²²⁾一行は八月一日にブラウンシュヴァイクに到着、一八〇六年の父の戦死後から公爵を継いでいる弟に会い、月末まで同地に滞在し、冬をナポリで過ごす計画をもってイタリアに向けて出発した。この時点では翌春にはブラウンシュヴァイクに戻り、故郷に生活の本拠を置くつもりだったが、ナポレオンの百日天下による戦争の再発と弟の戦死によって、翌年には叶わぬ夢となった。

ブラウンシュヴァイク滞在中に一行から離れる者が出た。リンゼイがスイスで療養中の姉レイディ・グレンバークヴィーのもとへ発ち、レジャーが病気でイギリスへ帰った。レジャーの代わりにケッペル・クレイヴンが加わり、また侍従武官としてヘス大尉（義弟ヨーク公の私生児、娘のシャーロット妃と交際したことがあった）が加わった。キャロラインはコーンウォール公爵夫人の服装で、八月二九日にブラウンシュヴァイクを出発、ピルモントまで弟の見送りを受けたのち一路南下し、ゲッティンゲン、フランクフルト、ハイデルベルクをへてシュトゥットガルトに到着した。同地でウエルテンブルク王フリードリッヒ一世の歓待を受けた。その後スイスに入り、チューリヒ、ルツェルンを経てベルンに着き、同地でやがて娘シャーロットの夫となるザクス・コーブルク家のレオポルド王子の姉でロシアのコンスタンティン公爵夫人の訪問を受けた。その後ローザンヌをへて九月二五日にジュネーヴに到着した。⁽²³⁾

ところでブラウンシュヴァイク滞在中にドイツ人の部屋付き女中レイツェンが病気のため外れ、やむを得ずアネット・プレジンガーを雇い入れた。しかしキャロラインはプレジンガーの品行に不安を抱き、

ジュネーヴのキャムベル宛に行儀正しいレイディ付き女中をひとり見つけてほしい、と手紙を書いていた。⁽²⁴⁾ジュネーヴにおいて、キャムベル経由で推薦されてきたのがルイーーズ・デュモン（Louise Dumont イギリスでは Demont と綴られた）であり、キャロラインに気に入られ、一七年十一月まで筆頭の部屋付き女中を務めた。「デュモン嬢はとても良い娘さんです。まったく化粧をしないのですが。けれど万事うまくいっています」とミラノからキャムベル宛の手紙に書いた。⁽²⁵⁾

のちに詳述することになるが、デュモンはミラノ委員会で証言し、さらに貴族院の「裁判」の際にも証人となって、キャロラインの「不義」を「証明」するもっとも重要なキーパーソンとなった。自ら深く敬愛していたという女主人を裏切ったのである。彼女の実家はジュネーヴからレマン湖北岸を三〇マイルほど上った小村コロムビアにあり、母は夫が死亡したのち彼女を連れて再婚したので、父違いの妹がいた。この妹マリエッタ・ブロンものちに侍女として仕え、姉が外れたのち、代わって部屋付き女中となり、その後も終始キャロラインに付き添ってイギリスに来ることになる。⁽²⁶⁾小姓のクラックラー夫妻は妻の出産が近づいたため、離れてイギリスへ帰った。⁽²⁷⁾

一行は再びローザンヌに戻り、ここでデュモンが部屋付きの勤務につき、やがてアルプスを越え、一〇月八日にミラノに到着した。オーストリア政府は一行を歓待し、皇帝の侍従であるジッツィリエル伯爵は市内の名所を案内した。のちにキャロラインが語るところでは、伯爵はキャロラインに対し、今後イタリアで暮らすにあたって、大家族を取り仕切る術を心得ていて、雅な生活を経済的に運営していく要になる人物が必要だ、と熱心に勧めた。彼女もそれに同意し、伯爵が

推薦する人物を受け入れることにした。この人がバルトロメオ・ベルガミであり、ピノ伯爵の配下にいたミラノ近郊出身の軍人であったが、戦争終結とともに自由の身になっていた。ピノ伯爵配下のときと同じ待遇で、侍従として雇い入れたが、やがて信頼を得て実質的な「侍従長」(superior kind of courier)の役割を背負うようになった。ベルガミに対する妃の信頼は後述するベリー宛の手紙が語っている。⁽²⁸⁾ 彼にはミラノ近郊に住む妻がいたが、姿を見せたという記録は見あたらない。

ミラノを一〇月一八日に発った一行は、フィレンツェをへて、月末にローマに着いた。ローマではスペインの元国王夫妻の表敬を受け、また教皇にも拝謁した。さらに南進して一月八日にナポリに到着、連絡していたナポリ王ヨアヒム・ムラト夫妻(夫人はナポレオンの妹)から大歓迎を受け、ナポリは嫌いと言いながら、予定通り翌年三月まで滞在する。ナポリでは物価は比較的安いが、広大な住居の借り上げ賃や南国の風に浮かれた仮面舞踏会などで出費がかさみ始め、資産管理を依頼しているロンドンの不動産業者モーゼス・ホーパーにロンドンに残してきた住居や家具の処分を依頼している。⁽²⁹⁾ 部屋付き女中の仕事はブレジンガーとデュモンが務め、他の従者に変化はなかったが、ブラウンシュヴァイクから連れてきた三人の歩兵のうち一人が飲んだくれのため送り返した。その補充の兵士の人選をベルガミに依頼し、元ピノ伯爵の配下について、ベルガミ家の召使いをへてムラト王の厩舎で働いていたテオドーレ・マジョッキ(Theodore Majocchi)を一月初めに馬番として採用した。⁽³⁰⁾ マジョッキは一行がペーザロに居を定めた直後の一八一七年八月末、他の召使いと喧嘩して持ち場を離

れたため、一〇月に解雇されたが、実質的にはベルガミの配下として二年九ヶ月間働いた。後述するように、マジョッキは金銭で買収されてキャロラインを裏切り、ミラノ委員会と貴族院で作為が見え透いた証言をし、不都合なところは「覚えていない」(Non mi Ricordo)を繰り返したキーパーソンの一人である。

ナポリ滞在時から、ベルガミがキャロライン家の行事や支出のかなりの部分を仕切っていたようである。⁽³¹⁾ キャロラインはベルガミを信頼し頼るようになり、二人は親密になった。この親密さは、後にイギリス当局側についた批判者や証人たちの攻撃的になった。後に詳述するが、オムプテード男爵はすでに一五年一月二四日には、キャロラインの「密通」の話を作り出す作業を始めていた。後のミラノ委員会における証人たちは、この時期に、キャロラインが成長しすぎたウィリアム・オースティンの寝室を彼女のもとから別室に移らせたことについて、それはベルガミとの自由な密通を可能にするためだった、などと証言した。この証言について同時代の伝記作者ヒューイッシュは根拠がないと主張する。⁽³²⁾ またキャロラインはナポリでムラト王の歓迎に应えて仮面舞踏会を催したが、後に批判者たちは次のような証言をした。キャロラインは何度もマスクや衣装を変えて現われ、もっぱらベルガミをパートナーに選んで踊った。またベルガミが早くに会場を出て帰ってしまったので、彼女はベルガミの後を追っていきホールに戻るよう説得したが、ベルガミは戻ろうとしなかった。彼女はわびしく落ち込んで会場に戻った、などと。ここでもヒューイッシュは「想像力たくましい頭脳が生み出した作り話」と断じている。⁽³³⁾

一五年二月には一行から離れていたシャーロット・リンゼイが兄ノ

ースとともにナポリで合流し、賑やかになった。しかしまたブルームからの手紙が、夫側が離婚を策謀し再婚の方策を練っていると伝えてきたため、予定通り北イタリアに戻り夏をコモ湖畔で過ごすか、あるいは一氣にイギリスに帰るか、とキャロラインは悩み考えた。⁽³⁴⁾

結局当初の予定通り、三月一日キャロライン一行はローマに向けてナポリを出発した。そのときナポレオンがエルバ島から脱出したとのニュースが届き、また暗雲が立ちこめ始めたが、三月十五日、ローマ郊外の港キヴィタ・ヴェッキアから英軍艦クロリンド号でジェノヴァに向かった。キャロラインはクロリンド号上からエルバ島を望見しながら、ロンドンの親友メアリ・ベリ宛に、ホイットブレッドとブルームの判断がどうかはわからないが、「この地上で私を受け入れてもらえる場がロンドン以外になくなったときには、確実にイギリスに帰るでしょう。けれども、今はすべてのことがシバの女王のように非常にうまくいっています」と書いた。さらに追伸で「私はナポレオンの配下だった軍人を従者に加えています。この人は私にとってまったくの宝であり、誠実で思慮深く、この人を召抱え続けるつもりです。シカードは彼が入ってきたことをとても喜んでいますが。彼はミラノの出身で、……いま「イギリスに帰った」シカードに代わって彼の仕事を継いでいます」とペルガミとその役割について述べ、娘から楽しい手紙が三通届いている、早くに娘と再会できるように天のおぼし召しを、と手紙を結んだ。これほどイタリア生活を享受していたのだが、「ナポリは心底から嫌いで、そこに二度と戻るつもりはない」とも書いている。⁽³⁵⁾

キャロラインの外国滞在が長期化するにしがって、イギリス人の

女官や同行者たちは次々に彼女のもとを去っていった。ナポリを発つとき、女官レイディ・フォーブスとゲルはしばらく同地にとどまった後帰国するため、ヘスはイギリスへ、クレイヴンはパリへ行くため、一行から離れた。また途中のリヴォルノでリンゼイとその兄ノースがイギリスへと旅立ち、取引銀行家の妻ファルコネット夫人も子どもが住むスイスへ向かった。二五日にジェノヴァに到着し、海沿いの邸に宿所をおいたが、そこにリンゼイの姉レイディ・グレイバーヴィ夫妻が現れ、しばらく同行することになった。またキャロラインの要請を受けて、前年ブラウンシュヴァイクで別れたキャムベルが、六人の娘とそのガヴァネスを伴ってジェノヴァに合流し、六月にミラノで別れるまで女官の任についた。⁽³⁶⁾ キャムベルはのち一八年三月に牧師ペリと再婚する。一方、キャロラインの要請を受けたイギリス海軍士官ジョージ・ハウナムが加わった。ハウナムは両親を失った後キャロラインに育てられ、長じて海軍に入っていた彼女に忠実な青年であった。⁽³⁷⁾

しかしキャムベルの後任のイギリス人女官が見つからなかった。ジェノヴァからミラノへ馬車で移動したとき、キャロラインと並んで同乗したのはデュモンとオースティンのみで、ペルガミは騎乗して従った。キャムベル一行は別行動で遅れてミラノに着いた。⁽³⁸⁾ 一〇日ほどヴェネツィアに旅行してミラノに戻り、キャムベルがミラノから去った数日後に、ペルガミの妹でオーストリア人の零落貴族オルディに嫁いでいたアンジェリカ・オルディ(オルディ公爵夫人)が女官として加わった。オルディ夫人は寡黙でイタリア語さえよく話せず、知性に欠けていたが、従順でキャロラインに最後まで付き添ってロンドンに來ている。⁽³⁹⁾ 一行がヴェネツィアに旅行した際、宿泊したホテルでキャロ

ラインが自分の首飾りをはずしベルガミの首にかける、彼はそれをすぐにはずしてキャロラインの首にかける、といった遊びをしたことがホテル従業員によって観察されている⁽⁴⁰⁾。キャロラインの小宮廷においてベルガミの影響力が大きくなっていた。

キャロラインはミラノ北方の景勝地コモ湖のほとりに住居をおくことにした。最初に住居をおいたコモ近郊のヴィラ・ヴィラーニでは、かつてイングランドのブラックヒース在住時に経験したのと同じように、多くの名士や近隣の住民が来訪した。彼女が六月一日のワテールローの戦いについて耳にしたのもこの時期であり、その二日前のカートル・ブラの戦いで弟ブラウンシュヴァイク公が戦死したことを、客人として頻繁に訪れていたハノーヴァのオムブテール男爵から聞き、衝撃を受けた⁽⁴¹⁾。故郷で暮らすという当初の夢は遠のき、年若くして継承した甥の摂政を務める気持ちも一時あったが、諦めた。やがてコモ湖西岸にあるピノ伯爵夫人所有の邸宅ヴィラ・ガローヴォを一五万フランで購入した。この邸宅は風光明媚の地にあり、皇太子妃の邸宅に相応しくするため、画家モンチェリに依頼して絵画を飾り内装を改め、周囲の整備にも資金を投じ、ヴィラ・デステ (Villa d'Este) と命名した。この新居で近隣の住民を招いたパーティを催し、地元の人詩人ベリーニが頌詩を贈るなど幸先は良かった⁽⁴²⁾。ここに居をおいた四ヶ月の間に、ベルガミ家の一族の多くの者がキャロライン家に仕えるようになった。母リヴィアがしばしば家事に携わり、弟のルイジが兄を手伝う従者、妹のマルティニ夫人がリネン係になり、さらに従兄弟二人も炊事場の事務、警備員として、その息子の一人も乗馬従者となっていた⁽⁴³⁾。

またこの時期一八一六年一月から、ナポレオン軍麾下の将校だったジセッペ・サッキも従者に加わり、その後盗みで解雇されるまで、ほぼ一年間務めた。サッキも後述するように、妃を裏切って証言したキーパーソンの一人である⁽⁴⁴⁾。

2 地中海からエーゲ海へーチュニス、アテネ、イェルサレム

ヴィラ・デステには一月初めまで住み、キャロライン一行は冬を迎えて同一二日、地中海艦隊を利用して再び地中海への旅に乗り出した。一四日にリヴァイアサン号 (ブリッグス艦長) でジェノヴァを出港し、一路南下してシシリーに向かいパレルモに一〇日間、メッシーナに五週間滞在した。翌年一月六日、クロリンド号 (ペチエル艦長) でメッシーナを出てシラクサに停泊した。当初ペチエル艦長はキャロライン一行を運ぶのを拒んだ。それは、軍艦は乗客を運べないことによる費用の問題、及び身分の低いベルガミと一緒の食卓につくのはこまる (ブリッグス艦長から引き継いだもの)、という二つの理由によるものだった。彼女はその意見を受け入れ、艦長とは生活を区別することにした。結局ペチエルは船室をキャロラインに開放してくれ、それをオルディ夫人用、デュモンと妹のマリエッタ・ブロン用の部屋に分け、彼女も独自の食卓をおき、専用の料理人をおいた⁽⁴⁵⁾。ベルガミの娘チロ・ヴィットリン (一八一四年生まれ) がミラノから同行しており、キャロラインが可愛がりしばしば膝の上においた⁽⁴⁶⁾。

忠実な元海軍士官ハウナムは、しかしベルガミをよく思っていなかった。彼はある日、キャロラインの小宮廷を第二級のイタリア人であらめてしまった、とベルガミに食いついた。ハウナムは家政を掌握した

ベルガミを嫌い、対立は次第に激しくなった。⁽⁴⁷⁾しかし今やこのキャロラインの小宮廷はベルガミがいてこそ、何とか円滑に運営できる状況になっていた。キャロラインは、艦長たちに蔑視されたことをきつかけに、頼りにするベルガミに貴族の肩書きを与えたいと強く思うようになった。シラクーサを出てカターニアに停泊していたとき、同地から一〇マイルほど南方に男爵領に属する所領が売りに出ていることを聞き、ベルガミのために即座に購入した。彼はその領主として、まずキャロラインからバロン⁽⁴⁸⁾（バロン・ベルガミ・デラ・フランチナ）と呼ばれ、家令の地位についた。またカターニアでキャロラインは画家を雇い、トルコ風の衣服を着た彼女とベルガミ、さらにウィットリ⁽⁴⁹⁾ンの肖像を描かせた。

キャロラインの冒険の長旅はこれから始まる。一行は当時シシリイ地区の小艦隊の指揮官だった海軍将校フリント艦長が指揮する三本マストの商船（ボラッカ）で、地中海沿岸のチュニスに渡った。このボラッカをジョージ三世用のヨットから名称を借用してロイヤル・シャローット号と呼んだ。チュニスではイギリス領事オグランダーの世話になり、また現地のムスレムのパシャ、マムース・バシヨウの歓待を受け、パシャの宮殿に逗留した。チュニスに一月月滞在したが、その間キャロラインは、ナポリとサルデーニア出身の奴隷たちの解放に貢献した。これは最初、フランス領事が本国の指令で奴隷の解放を交渉していたが、海軍力を持つイギリスがナポリとサルデーニアの王の意向を受けて仲介に入り、エクスマス提督がパシャに対して、英領セント・アンティオコ島を侵犯したチュニス人の処罰を要求しただけでなく、「奴隷はすべて例外なく解放」するよう要求した。キャロライン

はすでに奴隷の解放を喜ばしいと歓迎する意向をパシャに語っていたが、政治問題にはいっさいかわらないと明言していた。提督の要求に対し、パシャは脅しには屈しないと激怒したが、しばし考えて皇太子妃のご意向には逆らわない、サルデーニアの奴隷たちは妃に預ける、と言明した。提督は慌てて、この問題は妃と関係ないことだと応じた。この事件が彼女の一行をチュニスから早々に退去させることになったが、その後提督も介入から手を引き、奴隷は解放されたのである。⁽⁵⁰⁾

四月初め、キャロライン一行は借り上げた三〇〇トン余りのロイヤル・シャローット号でギリシアへ向かう。船長は持ち主のヴィンチェンゾ・ガルジローが務めたが、それまで戦艦を指揮していたフリン大尉（John Flynn）がそれを指揮し、ハウナムも協力した。三月二二日にチュニス港を出帆するとき、停泊するイギリス艦隊から二一発の祝砲が打ち上げられた。二九日にはマルタ島に検疫のため寄港し、三日にいいいよ地中海を一路東に乗り出し、三日目に岸壁がそそり立つキティーラ島に到着したが、上陸せずにミロス島へ進んだ。ミロス島を四月五日に出帆し、八日にアテネに到着した。アテネ市街は港から約四マイル離れていたもので、イギリス領事が手配した数頭の馬で市街に行き、設備がもっとも整っていたフランス領事館に逗留することになった。キャロラインは早速翌日から好奇心を発揮して史跡を訪ね、さまざまに催しに加わった。彼女は同地の負債者監獄にいる瘦せ細った三百人の収監者の話を聞き、その負債を支払ってやり、釈放させた。アテネの長官も従者を連れて何度も表敬訪問に来た。二四日にアテネを立ちコリントへ、さらにデルフィ、スパルタなど歴史的都市を訪れた。⁽⁵¹⁾

その後ギリシアを出てエーゲ海を北東に進み、トロイに上陸して遺跡を訪ねた後、六月五日にはダーダネルス海峡を通ってマルモラ海に入り、七日にイスタンブールの港に着いた。イスタンブールの市街に入るとき、妃は雄牛が引く牛車に乗りデュモンと妹ブランだけを横に座らせ、他の一同は徒歩で進んだ。最初に逗留したのはイギリス大使館であった。キャロラインはトルコのエキゾチックな文物に触れて興奮し、金欄の刺繍がある衣服など狂ったように買い込み、別便でイタリヤに送った。しかし到着後まもなく疫病が蔓延したため、市街から一五マイルほど離れたヨーロッパ外交官の別荘地ビウテルで大部分を過ごした⁽⁵²⁾。しかしトルコの太守はヨーロッパ人の王族を煙たがる傾向があったので、長居はせず一六日には同地を発ち、トルコ西岸を南下してイエルサレムへ向かった。聖地巡礼の目的を立て、船中で一行の名称を「聖キャロライン騎士団」(the Order of St. Caroline)と決め、ベルガミをその団長(Grand Master)と称した。パレスティナ沿岸に着き七月二日サン・ジャンヌ・ダクル(アッカ)に上陸、さらに南下してジャッファに上陸したが、地域を治める太守に巡礼の許可を求めるためアッカに戻った。太守は最初のうちは申し出を断ったが、熱意に動かされて許可し、五枚のテントと必要なだけの馬、護衛の将兵、案内人、荷物運搬用のラクダを貸与してくれた。七月八日夕刻六時、二〇〇人ほどに膨れあがったキャロライン一行はイエルサレムに向けて出発した⁽⁵³⁾。

夏になり日中は暑いので夕刻と朝の時間に歩き、ナザレをへて一二日午後九時にイエルサレムに着いた。イエルサレムではカプチン派修道院内に逗留した。聖地では聖墓参拝をはじめダヴィデ王の家、ソロ

モンの教会遺跡など、多くの聖なる場所を訪れ、往事を偲んだ。その後警護の兵士を増やし、聖者の跡を追ってヨルダン川西岸からジェリコまで行き、またイエルサレムに戻った。一七日にイエルサレムを発って帰路に入り、翌日ジャッファに到着し、すでに待機していたロイヤル・シャーマン号に乗り、地中海を西に向かった。キプロス、ロードス、クレタの島々に停泊しながら、シシリーのシラクーサにたどり着いたのは八月一九日であった。帰路の地中海の船旅は真夏になり晴天が続いたので、一行は、船のデッキにテントを張って日中はデッキで過ごすことが多かった。この状況を、ミラノ委員会及び貴族院における「裁判」で、船主ジェタノ・パトゥルゾと船長ヴィンチェンゾ・ガルジローが、衣服もろくに着けずに彼女とベルガミが手を取り合っていたとか、砲門の上にベルガミが座りその膝の上に彼女が座っていた、などとキャロラインの「不義」を証言した⁽⁵⁴⁾。キャロラインによる後のメモでは、「私は衣服を脱ぐことなどまったくせずに、そこに〔テントの中に〕休んでいた。私と一緒にデッキにいた人たちも同じようにしていた」と述べている⁽⁵⁵⁾。追想録の著者ヒューイシュは二人の密通の物語は、「実際に起こったことというより、想像力に富んだ頭脳が生み出したものであった」と述べている⁽⁵⁶⁾。

シラクーサはパレスティナを出てから最初のキリスト教地区であったが、上陸に当たって厳重な検疫が課せられ、一行全員が検疫を終えるのに四〇日を費やした。その間キャロラインには隔離された小住宅があてがわれた。八月二七日に水先案内人を得てシラクーサを出航しようとしたとき、アルジェリア人の攻撃を受ける怖れがあるという情報があり、オーストリア海軍のフリーゲート艦の申し出を受け入れ、

同艦に乗り換えて出港した。三一日にメッシーナに到着、再び検疫を受けて九月七日にメッシーナを発ち、一五日無事にローマに到着した。ローマではイタリア政府関係者や同地在住のイギリス人名士たちの歓迎を受け、またローマ教皇にも拝謁した。一七日にローマを発ち、陸路でフィレンツェ、パルマ、ミラノをへて二日にヴィラ・デステに帰り着いた。⁽⁵⁷⁾

はぼ一〇か月ぶりのヴィラ・デステだったが、留守中に様子が変わっていた。大きな変化は邸内に劇場ができていたことだった。その劇場で祭りが催され、キャロラインとペルガミが愛人同士となつて一幕の劇を演じたので、また彼女の乱行として喧伝されることになる。しかしヴィラ・デステに戻つて判明した最も深刻な事態は、これまで再々顔を出していたオムプテード男爵が、キャロラインの行動と生活を探る密偵・スパイだったことであつた。キャロラインはようやく帰ってきたものの、ヴィラ・デステに長く住む気持ちは消えていった。彼女はこの時期ミラノ近郊の一所領バローナを二万フランで購入し、後にこれまでの忠勤に報いるためペルガミに贈与した。この所領はヴィラ・バローナと名づけられ、彼女と一行もしばらく滞在した。⁽⁵⁸⁾

同年一月には再びヴィラ・デステから旅に出た。一行はしばらくルガーノに移り、翌一七年二月にはバローナを発ちバイロイト在住の妃の叔父を訪ね、ミュンヘン、カールスルーエ、リンツをへてウィーンに入った。キャロラインはオーストリア政府に対し、オムプテードによる密偵行動によって受けた侮辱と引き起こされた不安を述べ、政府側の満足できる返答を求めた。ウィーン駐在イギリス大使ステュア

ート卿は姿をくらし、何の挨拶もなかった。キャロラインは大使の所在がわからないと知らせてきた手紙を、そのままロンドンのキャニング宛に送つた。二年半前に初めて訪ねたときの歓迎とは打つて変わり、オーストリア政府の扱いは冷淡で、ロンドンの摂政政府と緊密な連絡があることが明白に感じられ、彼女は早々にウィーンを離れた。⁽⁵⁹⁾このときキャロラインはまだ気づいていなかったのだが、ステュアートは兄である外相カーズルリー卿（ロバート・ステュアート）の内幕の指示を受け、オムプテード男爵とはかつて、キャロライン妃の「不義」あるいは「皇太子妃にあるまじき行為」の実態をつかむ作業を進めていたのである。カーズルリー外相を軸としたこのスパイ活動は記録で見ると、一八一六年一月には始まつていた。⁽⁶⁰⁾

妃はその後トリエステでは大歓迎を受け、四月末にヴィラ・デステに戻つたが、ヴィラ・デステもオーストリア当局の監視がさらに強化され、残っていた召使い、従者たちの様子がよそよそしくなつていった。キャロラインはヴィラ・デステを棄てる決心を固め、イギリス、オーストリアの当局の監視から自由な、新たな安住の地を求めることにした。⁽⁶¹⁾次の安住の地として選んだのはローマ教皇領に属するペーザロである。ヴィラ・デステは売りに出し、八月にアドリア海に臨むペーザロに到着し、やがて郊外の相應しい場所に居を定めた。最初はペーザロ郊外一マイルほどのヴィラ・カプリリに仮住まいしていたが、すぐ近くの所領を二五〇〇フランで購入し、五〇〇ポンド以上かけて補修を加え、ペルガミの娘に因んでヴィラ・ウィットリアと名付けてこれを本拠にした。キャロラインは、その後一九年八月から半年間フランス南部で過ごしたが、それ以外は二〇年三月にイギリスへの帰国

を決めるときまで、このペーザロ郊外に生活の本拠をおいて、干渉から解き放たれ、南国の明るい空と海のもとで元氣を取り戻した。⁽⁶²⁾ ヴィラ・デステは一九年五月によりやく売れて負債の一部は返済できた。⁽⁶³⁾

二 追跡する密偵—オムプテータ男爵

1 外相カーズルリーの指示

一八一六年九月にヴィラ・デステに帰ってきたキャロラインは、地元の警察から邸がスパイに取りつかれている、という連絡が入り衝撃を受けた。彼女の留守中に、彼女の寝室や居間のかぎが開けられ、くまなく調べられていたのである。それを指示し操っていたのがフリードリヒ・オムプテータ男爵であり、この時点で彼を密偵として雇っていたのが、ハノーヴァー政府のムンスター伯爵（キャロラインの昔の家庭教師の息子）とウィーンでキャロラインの前から姿を消した駐オーストリア大使ステュアート卿であった。ハノーヴァーの男爵でローマ教皇庁への使節を務めているオムプテータは、一四年末にキャロライン一行のナポリ滞在中からしばしば姿を見せており、またジェノヴァに戻ったときも現れ、彼女も歓迎してしばしば食事をともにした。彼女はオムプテータが妃への挨拶と護衛のために出仕していると思いついていたが、彼の真の目的は、ロンドンの摂政の指示を受けて、キャロラインの生活と行動を内偵しロンドンに報告するためであった。⁽⁶⁴⁾ エドワード・パリーは、ベルガミについて評した一五年一月二四日付けオムプテータ男爵の次の報告に注目する。ベルガミは「身長六フィートをこえるアポロのようなすばらしい堂々とした容姿の持ち主であり、彼の見かけの美しさには皆ひきつけられている」。すばらしい容姿

で頼りになりそうなベルガミを見て、キャロライン妃の愛人Ⅱベルガミという虚構の筋書きを作って噂を広げたのが事の始まりであり、レステリ、マジョッキ、サッキ、クレデーなど妃の従者たちをそのかして密通の物語を仕立て上げようとした、とパリーはとらえている。⁽⁶⁵⁾

筆者が調査した記録を追うと、彼はすでに一五年三月一日付で、ナポリからフランス語の手紙を送り、キャロラインとベルガミの親密さについて報告し、また同年一二月、ミラノからヴィラ・デステにおける妃の生活について送った手紙が残っている。⁽⁶⁶⁾ 彼によってキャロラインとベルガミの親密さがいち早くロンドンに伝えられたのである。⁽⁶⁷⁾

オムプテータに託された使命は、外相カーズルリーが駐オーストリア大使の弟ステュアートに送った一六年一月二一日付けの内密の指示文が語っている。われわれがオムプテータらの協力によって進めている目的は次の二つだとカーズルリーは明確に説く。一つはスキャンダルで体面を傷つけた妻から摂政殿下を救い出すため、何人も疑えないような確定的な証拠を集めること、それにより離婚が可能となるものでなければならぬ。いま一つは離婚まで行けなくても、キャロライン妃のイギリスへの帰国を摂政殿下が正当に拒否できるように一群の証拠を集めることである。⁽⁶⁸⁾ 摂政側の立場がここにきわめて鮮明に説かれており、離婚できない場合でも帰国させない、という断固とした方針を固めていた。外相の指示に対するステュアートの返信は、オムプテータを通じてキャロライン妃の私生活について証拠集めに努めている、「このまことに汚くまことに不名誉な仕事」への協力者を得るのは容易でないこと、オムプテータがいまムラトの知り合いというふれ込みで妃に出仕できると主張している男を買収し、偽の鍵を使って室

内を調べさせる計画などを提案していること、を紹介し、さらに妃のもとにはハウナム大尉を除いて身分の低いイタリア人しかいないので、イギリス人の協力者を得るのは難しい、仲間に引き入れる次の最もよい標的は妃に仕える二人のスイス人女中である、とステュアート自身の意見を記している。⁽⁶⁹⁾この最初の男は後にマジョッキを買収したことが判明するジセッペ・レステリ（一六年八月から雇用、厩舎長）とみられ、後述するクレデー（馬匹係）も買収されており、男爵による買収計画のあらましが推察される。またスイス人女中とはデュモンと妹ブロンであり、デュモンはステュアートとオムプテータが狙いを付けていたキーパーソンであったことがわかる。

2 オムプテータの暗躍

キャロライン一行がギリシアからイエルサレムへ旅行している間に、オムプテータはヴィラ・デステ内外に現れ、キャロラインの私生活とベルガミとの関係を聞きただそうとした。そのため、留守居をしている従者、侍女に働きかけ、女主人を裏切って情報を出すよう強要した。イタリア人の使用人たちは皆それに応じなかったため、オムプテータはドイツ人に狙いをつけ、一八一四年一月二月のナポリ以来務めている調馬師・御者モリス・クレデーとさきに述べた問題が多い部屋付き女中アネット・プレジンガーを買収したのである。一行が旅から帰っていた一六年一〇月の祭りの日のこと、ヴィラ・デステの炊事場に一人の男が侵入する事件があり、ベルガミが勇気を奮って捕まえコモの警察に突きだした。その男がクレデーであり、キャロラインの住居の鍵を模造する目的で不審な行動をしていたのだった。コモ総督

の前で彼はオムプテータに金銭で買収されていたことを告白した。プレジンガーはクレデーの手引きをした。二人は一六年一月初めに解雇された。プレジンガーは身持ちが悪くクレデーの子を身ごもっており、実家へ送り返された。⁽⁷⁰⁾

失職したクレデーは、解雇された翌日、自らの非を詫びてまた復帰できるよう仲介してほしいと懇願する手紙を、妃の配下のトマシア騎士宛に送ったことが知られている。その中で、自分とアネットは皇太子妃への出仕の仕事から昨日解雇された。オムプテータ男爵にたぶらかされて、自分の最良の女主人でありもっとも寛容な妃を裏切ってしまった、恥をさらした報いであることを告白する。それは一年ほど前のことで、皇太子妃がイエルサレムの方へ出発する一ヶ月ほど前に、アムプローズ・チェザーティなる人物を介して、オムプテータ男爵から皇太子妃の寝室を調べるため、彼女の居室の鍵を手に入れてほしい、と強く要求された。最初はそのような悪巧みには加担できないと断っていたが、たびたび金を渡され、言うことを聞かねば破滅させるなどと脅され、弱い人間なので男爵の要求に応じた。そのとき邸内の状況と妃と関係がある人物について詳しく尋ねられた。いま正真正銘深く悔いているので、何とか取りなしてほしい、と述べている。⁽⁷¹⁾

解雇された二人は翌年ハノーヴァに招かれ、六月二一日、キャロラインとベルガミの関係について証言した。プレジンガー（二六歳）はナポリやヴィラ・デステで、妃の寝室の大型ベッドに他にも誰か寝た形跡があったなどと述べた。プレジンガーは出仕している間に二回妊娠しており、妃がデュモンを採用したのもプレジンガーに問題があったからであった。クレデー（二四歳）はベルガミについて次のように

窓 証言した。ベルガミは侍従として入り男爵になった。キャロライン妃

史 はベルガミと一緒に歩いただけでなく、同じテーブルで食事をとり、

同じ馬車に乗って外出した。二人が親密になってから、召使いたちが次々にやめていった。妃とベルガミの部屋が近接していたことは誰もが知っていた。彼は小宮殿の主のようであった。コモ湖に二人きりで小さなボートに乗っていたこともあった。またベルガミ一家のものが次々に邸で働くようになった。⁽⁷²⁾若輩のクレデーは確かにベルガミを妬んでおり、ハノーヴァの保護のもとで質問者が望む回答を与えたと見えよう。この二人は後にミラノ委員会にも召喚されて証言した。

オムプテータの策動ぶりは、一七年三月七日ミラノ発の『クーリエ』紙の記事を載せた『タイムズ』によると、次のように伝えている。皇太子妃はコモを去って当地に住んでいるが、多くの話題を提供している。ハノーヴァのローマ大使オムプテータ男爵が、当地に長居する明白な動機もないのにとどまって、皇太子妃を困らせている。

「妃は、オムプテータが当地に長居しているのは、権威あるドイツの宮廷でイギリス公使から妃の行動を監視するよう指示されているからだ、と思うようになった」。彼女はオーストリア政府にこの問題について問い合わせの手紙を送ったが、オムプテータは動くようには見えない。妃もイギリス政府で親しいキャニングに手紙を出し、「明らかに監視されていることに不満を述べ」、こちらに不安を与えないようにしてほしい、そうでなければイギリスに帰るという意向もちらつかせていた。⁽⁷³⁾記事ではさらに、妃はヴィラ・デステの購入に五千ポンドかけ、改修・整備にその同額近くをかけたが、不愉快な目にあったのでコモに再び住むつもりはないとの意向である、と伝えている。⁽⁷⁴⁾

『タイムズ』はミラノの朝刊紙から引用した続報を伝えた。妃の留守中に不正に鍵をせしめ、妃の汚点を求めて室内を調べまわすなどの悪質なことを行ったにもかかわらず、帰省した妃の前にそしらぬ顔で表敬したオムプテータに対し、妃に忠実な海軍士官（ハウナム）がミラノとコモの中間に位置するバルタシーマで対決することを申し入れた。オムプテータは決闘の場所をスイスに移すよう提案し逃げの策に出た。男爵の悪質な事件が発覚した直後に、妃が主催した大きな会にミラノ知事や主だった名士が出席したとき、妃はこのことをすべて知事に話した。知事はまさに「恥ずべき行為」と憤り、決闘申し入れのことも聞き、彼は紳士として遇するに値しないと語った。やがてオーストリア政府の侍従カンテナウ伯爵がコモに来て、この事件とハノーヴァとの関係はよく知らない、男爵は悪質なことは行っていないと自ら証明すべきだ、と述べた。しかし男爵は何らの弁明も行わず、ハウナムとの対決を避け、一ヶ月以上も後に延期してフランス国境に近いドイツ領を指定するなど逃げの手を打ったため、カンテナウ伯爵はそのような人物は信頼できないと宣言した。伯爵がミラノに戻った後、キャロライン妃は、ハノーヴァの男爵をオーストリア領内から追放する命令を出したとの連絡を受けた。⁽⁷⁵⁾決闘申し入れに関するハウナムとオムプテータ間の一連の往復書簡は、のちに貴族院の「裁判」中に、『タイムズ』が全文を掲載した。⁽⁷⁶⁾こうした経緯からみて、オーストリア政府はこの時点では、イギリス摂政政府からキャロラインの身辺調査、あるいは彼女と距離を置くことなど、とくに強い要望や指示は受けていなかったと判断される。

一八一七年にはさきの二人以外にも、オムプテータの指示によりハ

ノーヴァで証言した者がいる。その証人はキヤロライン一行が一七年三月にカールスルーエを訪れたときの宿の女中バーバラ・ケイスラー（あるいはクレス）、二二歳である。彼女は八月七日に金銭を渡され、ハートヴァから招集を受けて証言し、妃の部屋は一〇号、ペルガミの部屋は一二号だったが、一二号に妃が寝るからと広幅ベッドに変えさせられた。夕刻に一二号室に水をもって入ったら、ペルガミがベッドに横たわり、妃は衣服を着けてベッドに座っていた。妃は急いで起きあがった様子だった、などと述べたという。⁽⁷⁷⁾ 摂政側はこの証言を重視し、ケイスラーは貴族院の「裁判」の際にも証人として招かれた。⁽⁷⁸⁾

またキヤロライン一行が地中海からパレスティナへ旅に出た後、男爵はミラノにおいても証拠集めをした。一六年一月にはヴィラ・デステの内装にかかわった画家カルロ・ボッシに宣誓させ、証言させた。彼は庭で妃とペルガミが抱き合ってキスをしていた、などと述べた。さらに三月にはコモの劇場経営者コロムビと眼鏡・服飾商タッチョにも宣誓させ、妃とペルガミの部屋の間のドアは鍵がかかっていなかった、という証言を引き出した。⁽⁷⁹⁾

このように一八一八年秋のミラノ委員会による組織的な証人調査が始まる前に、密偵オムブテダーの暗躍によってキヤロラインとペルガミの密通に関する証拠集めはすでに進行し、密通は既成事実のようになっていた。また一八一四年から一六年までのキヤロラインの旅行について紹介し、思い出やエピソードを加えた小冊が、一七年にミラノ近郊ルガローで出版されていた。この小冊はまず英語で刊行され、その後イタリア語、フランス語版が続いて出たとみられているが、刊行後ほどなく妊娠中のシャロット妃のもとにも届き、彼女は母親の行

動に思い悩むことになった。⁽⁸⁰⁾ ミラノ委員会がキヤロラインとペルガミの関係について内密の本格的な調査を始める前に、二人の密通という既成事実がすでに作り上げられており、それに対応して後述するように、キヤロラインは帰国の決断さえしていたのである。

三 ミラノ委員会―その証人たちとキヤロライン妃

1 シャロット妃の急逝と委員会の発足

オムブテダーが暗躍していた一八一七年には、キヤロラインの望みを打ち砕く新たな衝撃的な出来事が起こった。それは摂政とキヤロラインの一人娘シャロットの急逝であった。シャロットは、両親の深刻な仲違いという不幸を背負って育ち、母の在英中にも母と自由に面会しにくい環境におかれていたが、持ち前の明るさをもって王位継承者として成長し、一六年四月、ザックス・コーブルク・ザールフェルト公の三男で気だての優しいレオポルドと結婚した。サリー州の克蘭ボーンロッジが二人の新居となり、その幸せそうな生活から、王室、政府はもちろん国民の多くが新たな後継者の誕生を期待するようになった。翌年には妊娠し、一月には王子誕生の予定であったが、胎内の子どもが成長し過ぎ、一月五日夜、四〇時間にわたる苦しい陣痛の末（人工的な分娩処置も取られず）男児を死産し、その数時間後の翌早晩に本人も他界した。シャロットの予期せぬ急逝は、期待されていた王子の死産も加わって王族、政府関係者のみならず、広く国民に大きな衝撃を与えた。キヤロラインの支援者であったロンドン市長ウッドは、シャロットの訃報に接するとセント・ポール教会の鐘を打ち鳴らさせ、市上級議員の臨時会議を招集して迫っていた祝賀

窓 行事の準備中止を決めた。市内の多くの劇場や商店は扉を閉ざした。

史 一月七日付け『タイムズ』は「悲嘆にくれた心情とその表現が、これほど強烈にあらゆる人々に広がった経験はいままでまったくなかった。……これほど衝撃的に広がったことは記憶にない」と書いた⁽⁸¹⁾。

シャーロット妃の急逝のニュースがペーザロのキャロラインのもとに届くには三週間ほどを要した。摂政はキャロラインとの関係は小さい断っており、レオポルドは気が動転していた。首相リヴァプールに促されて、レオポルドはようやく従者に姑宛の短い連絡文を教行書かせた。この手紙がローマ、ナポリに向かう国王の配達人に託され、ペーザロに届けられる。ハウナムがキャロライン宛の手紙を受け取ったのは、一月三〇日の早晩のことで、配達人はシャーロット妃の急逝を伝えるのだと告げた。ハウナムはキャロラインが起床する時間まで待つて寝室のドアをノックした。妃が顔を出したので「お伝えすることがあります。今朝、国王の配達人が来ました」と告げると、妃は「ああシャーロットが出産したでしょう」と応じたので、ハウナムはしばしば黙り込んだ。すると妃は「彼女が病気なの」「危険な状態なの」とたたみかける。結局、最悪の場合の覚悟もできているという妃の言葉をきいて、ハウナムは手紙を渡した。妃はそれを開封して読んだ後、ハウナムに返し、「ああ可愛そうなシャーロット」と大泣きに泣いた。しばらくしてやや冷静になり、「これで私の最後の希望がなくなってしまった。だがイギリスもまた大きなものを失った」と語った⁽⁸²⁾。

同日、ハウナムはイギリスのゲル宛に、皇太子妃は衝撃を受けて手紙を書く元気がない。彼女はイギリスへは帰らないと決心した、と書

き送っている⁽⁸³⁾。キャロラインの落ち込みようは深刻で、彼女の診療に当たっていた二人の医師フシナニとガッティによると、その衝撃で彼女は「激しい頭痛と胃痛」に襲われ、診察に行くと妃一人だけかまちは四歳のヴィットリンと一緒にベッドに横たわっていた、という。またかつて妃の女官を務め、親交が続いていたリンゼイ宛にも、毎日のように悲しみの便りが届いた⁽⁸⁴⁾。

キャロラインはシャーロットの訃報を聞いた後、イギリスの友人に宛てて次のように書いた。「いま私はイギリスへ行きたい気持ちでいっぱいです。愛しいシャーロットの墓の上で思い切り泣きたい。そしてもう一度誠実な友人たちと交わって楽しみたいと思います。この二年間、オムプテータと彼の密使たちによって、またいまは最近ミラノに着いた新たなスパイによって、たえず困惑させられて来ました。この敵たちの目的は私の幸せをすべて破壊し、私の死を早めさせることにあるようです。私はイギリスに戻り、私を非難している人たち全員と対決することに決めました⁽⁸⁵⁾」。

シャーロットの死去は、摂政側にとっても一つの転機になると思われ、妥当な理由を見出せば、キャロラインとの離縁は困難ではなくなったと思われた。しかし、この一八一七年は戦争終結後の深刻な不況のまった中にあり、イギリス国内の社会情勢は憂慮すべき状況にあった。すでに一六八九年からロンドンと工業地域において、苦境にあえぐ労働者層が「武装蜂起」を企てているという噂が流布し、当局は警戒していた。一七年三月にはストックポートとマンチェスターの失業中の織布工たちが、急進派労働者バグリとドラモンドの呼びかけに応じてマンチェスターに六〇〇〇七〇〇人も集結し、毛布をはおり、

摂政殿下への請願書を携えロンドンに向けて「飢餓行進」した。行路の途中で弾圧を受け多数の逮捕者を出して集団は解散したが、請願書はロンドンにたどり着いた仲間の一人クッドウェルによって三月十八日、シドマス内相に渡された。さらに六月にはノッティンガムシアのペントリッチで二〇〇〜三〇〇人が、失業中の元メリヤス編工ブランドレスらの指導のもと蜂起した。この地方的蜂起は広く工業地域の同様な企てと連携しており、またロンドンの大規模な蜂起計画との連結が伝えられ、当局の警戒心をあおり立てた。こうした民衆騒擾の動きは当局に雇われたスパイ、オリヴァーによって実態以上に大げさに当局側に通報されていた。しかも死刑を宣告されたブランドレスら三人のペントリッチ革命の指導者たちは、シャーロット妃の死去の翌日一月七日に処刑されたのであった。⁽⁸⁶⁾

やや平静に明けた一八一八年の三月、摂政は副大法官ジョン・リーチとはかり、法律の専門家を内密にイタリアに派遣してキャロラインの不義密通の証拠を集めさせる方針を決めた。オムプテータによる虚構に満ちた断片的な報告がついに事態を大きく動かすことになったのである。摂政は一八年七月、大法官とリヴァプール首相に対し、極秘のうちにミラノでキャロラインとベルガミの密通の確たる証拠を集めるよう指示した。八月初め、リーチはミラノに派遣する委員として、摂政の顧問を務める弁護士ウィリアム・クック、同じくリンカンズ・インの弁護士ジョン・アラン・パウエルと、ウィーンのイギリス大使館付き武官トマス・ヘンリ・ブラウン大佐の三人を選び、八月八日付けの手紙で正式に依頼した。クックは破産法の専門家で著書もある老法律家であり、引退の身であったが、代表格として引き受けた。パウ

エルは若い気鋭の弁護士であり、オムプテータからリーチに送られてきた報告を見て、証拠はきわめて不十分であり二人の密通は証明されていないと思った。ウィーン駐在のブラウンはイタリア、フランス語に堪能で証人尋問には不可欠な人物だった。さらにミラノ知事の元秘書サルダナ男爵の助言でイタリア人弁護士フランチェスコ・ヴィメルカーチとその事務所の協力も得ることにした。⁽⁸⁷⁾ 別行動で密かにミラノに向かった三人は、九月一五日にクックとパウエル、翌日にブラウンが到着して顔を合わせた。同二四日にヴィメルカーチも加えてブラウンの住居で初会合を行い、委員会の目的について合意した。⁽⁸⁸⁾ キャロラインの顧問弁護士ブルームは、摂政と彼の顧問たちの動きをすでに四月に感知していた。⁽⁸⁹⁾

2 キャロライン妃に背いた証人たち

王室文書館に保管されているミラノ委員会関係の膨大な文書をひもとくと、一〇月二六日から翌年五月一二日までの間に八五人、後日一名追加して計八六人の証人を召喚し、キャロラインとベルガミの関係について証言させたことがわかる。証言記録はイタリア語が原本で、まずフランス語に次いで英語に訳されている。委員会では証言の信憑性を高めるため、まず証人の出身、年齢、宗教、現住所、家族の状況を尋ね、法律に従い誠実に答えるかどうか、誓約させた。また各人の証言をまとめた証拠文書の末尾に各人に署名させた。証人のほとんどはミラノないしその近郊の住民であり、キャロラインに雇われていた若干名のほかは、出入り職人など、近在の住人が圧倒的多数であった。妃の旅先のヴェネツィア、カールスルーエのホテルの従業員なども少

ミラノ委員会における証人

氏 名	年 齢・性 別	住 所、職 業	証 言 日	貴族院での証言
ピエトロ・サルデリ	18 女	ホテル給仕	10月26日 (1818年)	
ダニエル・オルシンゴ	40 男	ヴァルラッシナ村, 宿屋経営	10月26日	
ジュロラモ・アントニオ・グッジャリ	26 男	コモ, 車夫	10月26日	
パティステ・マジョッキ	51 男	ミラノ, 下のテオドーレの父	10月27日	
カイトン・ネグリ	40 女	ミラノ, 主婦	10月27日	
カイトン・サッキ	42 男	ミラノ, 仕立職人	10月27日	
ルイジ・ロッソ	24 男	ルガーノ, 宿屋従業員	10月28, 30日	
ルイジ・マジョッキ	24 男	ミラノ, 独身	10月28日	
マリア・ソレリ	21 女	コモ, 部屋女中	10月30日	
フィリップ・リガンティ	48 女	ミラノ, 主婦, 材木商	10月30日	
ドミニク・マネガーリ	46 女	ミラノ, 主婦, 奉公人	11月 3 日	
ジセッペ・ガッリ	26 男	ミラノ, コモ, 宿屋従業員	11月 3 日	○
ルイジ・マッソレッティ	20 男	ミラノ, 宿屋ボーイ	11月 5 日	
ジセッペ・レステリ	33 男	*ミラノ, 厩舎長	11月 9 日, 12月 3 日	○
テオドーレ・マジョッキ	28 男	*ミラノ, 召使い, 馬番	11月20, 21, 24, 26日	○
ジセッペ・サッキ	29 男	*ミラノ, 元軍人	11月27~12月 1 日	○
マリア・トーナリ・マジョッキ	27 女	テオドーレの妻, 洗濯婦	12月 3 日	
ジセッペ・アンドレム	43 男	ミラノ郊外, 宿屋経営	12月 5 日	
ジュロラモ・パティステ・コロンボ	40 男	ミラノ	12月 5 日	
アレッサンドロ・フィネッティ	28 女	ミラノ, 装飾画家	12月10日	○
カルロ・ランカッティ	48 男	ミラノ, 菓子職人	12月10日	○
フランチェスコ・マラッツィ	27 女	ルガーノ, 主婦	12月10日	
ジョセフィーヌ・メンタスリ	30 女	ルガーノ	12月12日	
ユージェニオ・ボタッチ	36 女	トラリゴ, 主婦	12月22日	
ピエトロ・クッキ	50 男	トリエスタ, ホテル客室係	12月28日	○
マルク・ベルガンティ	30 女	ヴェネツィア, ホテル客室係	12月28日	
ジセッペ・ビアンキ	52 男	ヴェネツィア, ホテル客室係	12月28日	○
アントニオ・ロッソ	21 男	ルガーノ, 宿屋従業員	12月30日	
フランチェスコ・ビローロ	41 男	ミラノ, 料理人	1月 5 日 (1819年)	○
パオロ・リニ	39 女	ジュシン州, 主婦	1月20日	
ジュロラモ・グッジャリ	39 男	コモ	1月20日	
アントニオ・ヴァグリアヴィ	25 男	チェルノッピオ	1月22日	
ジュロラモ・ビアンキ	25 男	コモ	1月22日	
ジセッペ・グッジャリ	33 男	チェルノッピオ	1月22日	○
アントニオ・ビアンキ	38 男	コモ	1月22日	○
ジュロラモ・メジャニ	31 男	モンザ, 著述家	1月23日	○
フランチェスコ・カッシーナ	35 男	コモ近郊, 石工	1月25日	○
ガスバル・リヴァ	45 男	コモ近郊, 石工	1月25日	
ジュロラモ・マニョニ	32 男	ソツマ近郊, ホテル従業員	1月28日	
カルロ・ミノーラ	40 男	コモ, 船頭	1月29日	
アントニオ・フェラリ	41 男	チェルノッピオ, 石工	1月29日	
フランチェスコ・ラヨ・マッジョーレ	50 男	チェルノッピオ	1月29日	
アンリ・バジ	36 男	コモ近郊, 石工	1月30日	
ジセッペ・ラゴ・マッジョーレ	24 男	チェルノッピオ, 給仕	2月 1 日	

ミラノ委員会における証人（続き）

アンゲ・ベルナスコーニ	56 男	チェルノッピオ, 大工	2月1日	○
サミュエル・ブルナティ	59 男	コモ近郊	2月1日	
パオロ・オッジョニ	33 男	*モンザ	2月1日	○
カルロ・カラノヴァ	41 男	コモ近郊, 織布工	2月1日	
ジョヴァンニ・ルチニ	40 男	コモ近郊, 塗装師	2月1日	○
ジョヴァンニ・リコ	37 男	コモ近郊, 船頭	2月1日	
パティスタ・ヘレーニ	45 男	コモ, 船頭	2月1日	○
ジャック・マガッティ	35 男	コモ, 船頭	2月1日	
フランチェスカ・パグリアベ	37 女	ミラノ近郊, 主婦	2月2日	○
ジョヴァンニ・パティスタ・リヴォルタ	28 男	コモ近郊, ガラス屋	2月3日	
ジセッペ・トッリ	29 男	チェルノッピオ, 石工	2月4日	○
ジセッペ・メラータ	55 男	チェルノッピオ, 労働者	2月4日	
パオロ・テッタマンシ	48 男	チェルノッピオ, 労働者	2月6日	○
ジセッペ・カルトシオ	44 男	コモ, 織布工	2月6日	
ルイジ・ガルディニ	41 男	コモ近郊, 建築工	2月8日	○
ラスカル・ファサナ	22 男	チェルノッピオ, 織布工	2月8日	
ジセッペ・チェルヴァディネ	23 男	チェルノッピオ, 織布工	2月8日	○
ジェロラモ・マルティネッリ	26 男	チェルノッピオ, 召使い	2月8日	
ゲオルグ・コルティチェリ	45 男	コモ近郊, ホテル業	2月10日	○
ドミニコ・ガッティ	26 男	コモ近郊, 石工	2月10日	
ジェロラモ・フォンタナ	24 男	コモ近郊, 石工	2月10日	○
フランチェスコ・ベンゾニ	43 男	コモ, 荷担ぎ人夫	2月10日	
ドミニコ・ブルサ	40 男	コモ近郊, 石工, 建築工	2月11日	○
パオロ・ラガゾーニ	25 男	コモ近郊, 石工	2月11日	
アントニオ・ゲノリニ	20 男	コモ近郊	2月11日	○
アンブロア・ビアンキニ	33 男	コモ近郊, 職人	2月11日	
ジェロラモ・パティスタ・ビアンキ	32 男	コモ湖畔	2月12日	○
アントニオ・リヴァ	29 男	コモ湖畔	2月12日	
ジセッペ・ムッショニコ	33 男	コモ湖畔, 織布工	2月12日	○
パオロ・ノセダ	25 男	コモ湖畔, 織布工	2月12日	
フェリックス・ポルタ	62 男	チェルノッピオ, 船頭	2月12日	○
ジャック・ネグレッティ	35 男	コモ, 機材整備	2月15日	
ヴァーレンティン・カラディニ	46 男	コモ, 牧舎管理人	2月15日	○
ジュネヴィエーヴ・ビロ	50 男	ヴェネツィアのホテル部屋係	2月16日	
オノラト・ミナ	34 男	ルガーノ, 石工	2月18日	○
フィリッペ・バジ	38 男	コモ近郊, 石工	2月18日	
アンジェ・プロジニ	38 男	ルガーノ, 石工	2月18日	○
ルイーゼ・デュモン	25 女	*スイス, 部屋付き女中	2月2~27日	
バーバラ・クレス	24 女	カールスルーエ, 召使い	5月12日	○
アネット・プレジンガー	28 女	*女中	5月12日	
モーリス・クレデー	25 男	*従者, 馬番	5月12日	○
ヴィンチェンゾ・ガルジエロ	男	*帆船の船長（後日証言）	12月23, 24, 29日	

*従者として旅に同行した者。 ○貴族院の「裁判」においても証言した者。

出典 Royal Archives, George IV, Box 9/1, MSS., Report of W.Cooke and John Allan Powell, Appendix, B.C.D. *Hansard's Parliamentary Debates*, second series, vol.2 (1820), 804ff.

窓 数含まれていた。そのうち二人が、妃の帰国後の貴族院における

史

「裁判」で国王側が召喚した証人二人のなかに含まれており、残りの五人のうち三人はイギリス人、他の二人（地中海を航行した帆船の持ち主、ヴィラ・デステのパン屋）は新たにロンドンに招いた者であった。なお記録によると、イタリアからロンドンに送り出された証人として、いずれもミラノ委員会で証言した三人の名が記されている。マジョッキの妻など貴族院では証言しなかった者も招かれていた事を示す。⁽⁹⁰⁾

この証人のうち委員会側にとってもっとも重要な人物は、部屋付き女中として妃に親しく仕えた黒髪的美女ルイーザ・デュモン二十五歳であった。彼女の証言は一九年二月二日から二七日まで、実質二一日間に及んだ。証言記録も、他の証人のものは要約の形であるのに対し、彼女のものは問答式で詳細にわたっている。しかし、デュモンが敬愛していた女主人を裏切って証言するまでには若干の経緯があった。デュモンは一八一七年になると、その前年一月から妃の厩舎係に雇われていた元軍人のジセッペ・サッキと親しくなっていた。一七年一月、キャロライン一行のローマ旅行中に、サッキが妃の財布から四〇〇ナポレオン金貨を盗んだことが判明したため、妃はすぐにサッキを解雇した。盗んだときデュモンが彼を妃の部屋に入れたことがわかり、デュモンも解雇して両親の元に送還した。この二人はその後しばらく同棲していた。また前述のようにデュモンの異父妹ブロンも部屋付き女中として働いていたが、妹の方はその後仕事も続け、キャロラインの帰国とともにイギリスに同行する。⁽⁹¹⁾

解雇された後は定職もなくミラノに住んでいたサッキ (Giuseppe

Sacchi 本人の言によればミラノではサッキニ Sacchine と呼ばれていた) は委員会の招きに応じ、一月二七日～二月一日にわたってかなり露骨な証言した。ヴィラ・デステで妃とベルガミがいつも腕を組んで歩いていた、旅の途中で妃とベルガミが手を取り合って寝ているところを二・三回見た、馬車の中でベルガミが妃の首にキスしていたのも見た、そのときベルガミのズボンははだけていたなどと。サッキは解雇されたことに対し、キャロラインとベルガミに恨みを抱いていたことは次の事実から確実である。以下の史料は貴族院の「裁判」に備えて妃を擁護するため、指令を受けて二〇年八月九月に急遽ミラノ、ペーザロに急行し、告訴に対する反証を集めたジャベズ・ヘンリ (大法官庁の司法官で元イオニア諸島の植民地裁判官) の報告に基づく。⁽⁹²⁾ フレイザーはヘンリーが妃を擁護する証人を多数ロンドンに連れてきたことは述べているが、ヘンリが現地で集めた史料は、意図的にかほとんど利用していない。⁽⁹³⁾

重要なのは当時獣医長を務めていたジョヴァンニ・ロッシによる証言である。解雇された翌日、ロッシの前に現れたサッキは妃とベルガミに対して「あいづらは邪悪なやつらだ」と脅迫めいたことを言い、デュモン嬢と深い関係になったことでベルガミから非難され、解雇を言い渡された、自分は妃に報復するため剣をもっている、と言った。ロッシは以前にサッキからデュモン用の薬の注文を受け、サッキが目の前でデュモンに手渡したことがあり、二人の親密さには気づいていた。だがサッキがそれまで妃とベルガミを尊敬し良い人だと言っていたので、驚いたとロッシは語った。⁽⁹⁴⁾ ここで注意すべきは、サッキが解雇の理由を盗みにはまったく触れず、デュモンとの深入りした関係の

みをあげていることである。サッキの心中に、ペルガミを恨み、キャロラインとペルガミの間柄を暴露して報復したい、という情念が沸いていたに違いない。それゆえ委員会で証言するのはサッキにとって願ってもないことであつただろう。

サッキはさらに妃の身辺の世話係だった元愛人のデュモンを証人に呼び出すべく動いた。彼は証言を終えたその足で、ローザンヌの西外れコロムビア近郊の実家に帰っているデュモンのところに出向き（二月一〇日）、ミラノに証言に来るよう説得した。デュモンは躊躇した。そのような証言をすれば、まだ妃のそばで働いている妹が解雇される羽目になり、義父、母、異父姉妹の貧しい生活に逆戻りすることになる。姉妹は親元に仕送りをしており、証言に対する相応の報酬を要求しなければならぬ。このデュモンに対しサッキは説得を重ね、彼の言葉によれば「キケロのような雄弁」によって誘い出すことに成功した。サッキは嬉々としてデュモン呼び出し成功の知らせをブラウン宛に送った。買収はしなうと言っていたブラウンも、ローザンヌにいたサッキ宛にデュモンが証言にきてくれるよう要請した⁽⁹⁵⁾。

ミラノにきたデュモンは、妃がペルガミと親しくなったナポリ滞在のときから解雇されるまでの間について、ナポリ到着後しばらくたつて妃とペルガミが同じ食卓で朝食を取るようになった、ナポリでベッド・カヴァーに大きなシミがついていた、妃の寝室の大型ベッドに一人以上が寝た跡があつた、ある夜ペルガミが下着とスリッパ履きで妃の寝室に行くのを見た、など、多くのことを具体的に証言した⁽⁹⁶⁾。デュモンは証言の途中で質問全部には答えられない、とブラウンに訴えたことがあつたが、結局ブラウンの要請に負けた。委員会は証人の日当

を一日一〇ポンドと定め、デュモンには七三分分で七三〇ポンドを支払った。これは委員会が証人へ支払った最高額であつた。第二位は二〇日間で二〇〇ポンドのテオドーレ・マジョッキであつた⁽⁹⁷⁾。

解雇された後、デュモンは妹ブロン宛の手紙（一八年二月八日付け）において、「自分がいま最も悲しみ後悔しているのは、妃殿下から辞職させられたことと、妃殿下が私の性格を誤解し恩を忘れて私に罪を課したこと」だと述べ、不満を語った。さらにその手紙で、彼女がキャロライン一行のデュニス、ギリシア、パレスティナへの旅行に関する旅行記（Journal）をローザンヌで出版したことに触れ、この旅行記が当地のゴリサ夫人やイギリス人の間で話題になっているが、その中でキャロライン妃は「この世界で最良の最も愛すべき妃殿下」であると書いていることに注目してほしい、私が妃殿下を「限りなく尊敬し、限りなく愛慕し、感謝の気持ちでいっぱいであること」を、妃殿下も理解されるよう期待している、と縷々述べている。さらに妹への忠告を加え、妃のもとで働く間は結婚のことなど考えないように、私の過ちを繰り返さないように、とも記した⁽⁹⁸⁾。デュモンの心中には、妃に仕えていたときの良い生活、解雇されたことへの後悔と恨み、サッキとの関係、及び妹の問題が絡み合っており、サッキと金銭に誘われての証言であつたと言つて間違いない。

オムプテダーはデュモンの証言を得たのち、キャロラインのもとに仕えているデュモンの異父妹ブロンからも証言を得ようとして、一九年二月～三月に任地ローマからベッザロの警察署長ビッチ宛に協力要請の手紙を出した。ビッチは買収金千ルイをほめかしたそのような陰險な計画には関与できないと断り⁽⁹⁹⁾、その後まもなく三月一六日にオ

ムプテータがローマで急死したため、彼の暗躍もここで幕を閉じた。妃のもとには、オムプテータはキャロラインの暗殺あるいは毒殺を企んでいるという噂さえ伝わり、邸の炊事場や周囲の警備が強化されていた。⁽¹⁰⁾

いま一人の重要な証人はテオドーレ・マジヨッキである。マジヨッキはもとベルガミの配下であり、ベルガミの推挙により馬番として妃に仕えていたが、一七年一〇月、ペーザロ郊外ヴィラ・カプリ在住中に「他の召使たちと喧嘩したため」(キャロラインのメモ記録による)解雇された。その後ミラノに住んでいたマジヨッキは、ミラノ委員会及びのちの貴族院における証言で、キャロラインとベルガミとの「情交」の状況をまことしやかに証言し、当初はパウエルら委員会と多くの貴族院議員に二人の不倫を確信させたほどであった。⁽¹¹⁾マジヨッキの証言では、皇太子妃を中心としたヴィラにあたかもキャロラインとベルガミしか住んでいなかったかのように、二人の関係だけが大きくしにされた。しかし貴族院の裁判において、反対尋問に立った王妃派の弁護士ブルームが、妃らが住むヴィラにオムプテータ男爵がきたことを覚えていたか、と問うと、「知らない」と答え、男爵が合鍵を作って召使いを妃の部屋に侵入させ、トラブルを引き起こしたことを尋ねられると、「覚えていない」(Non mi Ricordo)を繰り返した。またヴィラに住むイギリス人について聞かれても、「覚えていない」であった。「Non mi Ricordo」は一種の流行語となり、次の一節を持つはやり歌もつくられパンフレットにして撒かれた。⁽¹²⁾

テオドーレ・マジヨッキは私の名前

そして誰もが知っている

私が王妃に背いて証言するために
イタリアから連れて来られたことを
外国でオムプテータと会って

ブラウン大佐のもとへ送られた

彼は「Non mi Ricordo」と言うために

たくさんのブラウン銀貨を私にくれた

まあまあ

ブルームの反対尋問により、貴族たちはマジヨッキの証言が偽証ではないかという疑いを強く抱くにいった。八月二三日の議会でダールントン卿は「刑罰法案を支持する最初の証人「マジヨッキ」が行った初日の証言は、正直なところ私の心に強烈な印象を与えました。しかし昨日行われた反対尋問は、逆にその印象を大いに弱めました」と語った。後にマジヨッキの偽証を確信したブルームは「マジヨッキに対する反対尋問がこの法案を敗北へと大いに押しやった」と述べた。⁽¹³⁾

マジヨッキが貴族院に証人として現れたとき、キャロラインは興奮して「おおテオドーレ、裏切り者」と叫んで席を立った。⁽¹⁴⁾その後貴族院の「裁判」が最終段階を迎えていた一月八日、なおロンドンに残っていたマジヨッキは、「善良な女性」として敬慕してきたキャロライン王妃宛に次の詫び状を書いた。「王妃様に背いて邪な罰当たりであることを述べたあなたの罪深い召使いをお許しください。私は一〇〇〇ポンドの金銭であの邪な証言をするようレステリ「厩舎長」に買収されていました。私がしたこと心からお詫びいたします。わが虐げられた女主人様のお許しを請うために、この一枚のメモを用意しました。あなた様のお許しが得られるまで心を休めることができません」。⁽¹⁵⁾

マジヨッキは明らかに偽証をしたのである。また妃のメモ書ではマジヨッキは「他の召使たちと喧嘩したため」解雇されたとのみ記されているが、ベルガミの配下にあった彼はベルガミが自分の賃金を引き下げようとしたと語っており、喧嘩の主要な相手は、それまで彼を引き立ててくれたベルガミではなかったか、と推考される。マジヨッキにはベルガミに対する妬みも渦巻いていたに違いない。レステリは証言者としては重要ではないが、ルイなる人物から三ヶ月分の給料を貰って妃のもとを離れ解雇されたといっており、離れた時期はマジヨッキと相前後している。オムプテータの策謀で一六年八月に妃のもとに入ったレステリが、予定通りマジヨッキを買収していたのである。買収されて妃を裏切った者が、レステリをはじめ既関係ない馬匹係に集中していたことも注目してよいだろう。

一八八一年一〇月以来、内密の調査を続けていたミラノ委員会は、翌年五月に計八五人の証人調査を終え、集めた膨大な証言集を緑の袋 (Green Bag) に入れて持ち帰った。クックとパウエルはその資料を整理し、七月一三日にその総括報告書 (手稿二五ページ) を副大法官ジョン・リーチに提出した。膨大な証言を巧みに整理したこの報告書はパウエルが執筆しているが、筆者がその内容をつぶさに検証したところ、パウエル自身が「最も重要な証言」と評価するデュモンの証言の比重が最も高く、次いでマジヨッキ、他はかなり差があつてサッキらが来る。その他の証人はほとんどが個別の状況に関する証言である。こうみてくると「反キャロラインの主要な「証拠」を提供したのは、さきに述べたようにいずれも解雇され、ベルガミに嫉妬と反感を持ち、ベルガミと親密なキャロラインに対しても反発し、報復心に駆

られていた人々であり、かつ買収されていたと判断される人々であった。彼らの証言は二人の関係の実態をどれほど正確に語っていたのだろうか。その証言が偽証性の高いものであったことは疑いない。ミラノ委員会は総額三万ポンド以上を費やしたが、その大部分が証人たちに支払われており、まさに買収費として使われたのである。一方、この調査により摂政側は離婚のための証拠は整ったと確信した。

3 キャロライン妃の去就

ミラノ委員会の調査で「確信」をつかんだ摂政側の動きは険しくなった。一九年に入るとキャロラインのもとに、彼女から王妃の地位を没収するための「私権剝奪法案」(Bill of Attainder) の準備が進められているというニュースが法律顧問ヘンリ・ブルームらによって伝えられた。ブルームはキャロラインがよりイギリスに近い場所に移ることを望んでいた。ブルームは一九年三月、キャロラインの生活ぶりを確かめ経理状況を調査し助言するため、代わりに弟の弁護士ジェイムズ・ブルームをペーザロへ送った。ジェイムズは三月初めからほぼ二ヶ月間、ペーザロ市街から一マイルほどの彼女の住居ヴィラ・ヴィットリアに滞在した。ジェイムズがロンドンの兄宛に送った長文の報告 (手紙) は、妃の生活の実態と心情を伝えており、妃の去就を確かめるために貴重な史料である。⁽¹⁰⁾

まず妃の住居と住人たちについて。主要な住人はバロン (妃はベルガミのことを男爵と呼んでいた)、バロンとともに家令役を務めるオリヴィエリ大佐、馬匹係ヴァッサーリ大佐 (二人とも誠に良い人物とブルームは評している)、バロンの弟ルイジ、歌手夫妻、オースティ

ン、五歳のヴィットリンであり、全体で八〇人、そのうち六三人はこの邸内に住んでいる。ペルガミ（三五歳くらい）は予想と違って「誠に真っ直ぐなきわめて良い人物だと考える」。彼は長身で容姿もよく当地の皆から好かれており、嫌っているのは彼を妬んでいるミラノの銀行家マリエッティくらいで、経理にも通じヴィラの管理をみごとに行っている。キャロラインは万事バロンに頼っている。妃の負債が増大したのは、ナポリ在住期のシカードのルーズな経理、資金を管理するマリエッティが妃の承認なしに支出していたこと（この件でペルガミと対立）にあり、ブルームの調査ではペルガミの方が正しい、としている。ブラウンシュヴァイク公の遺言書が示した一万五千ポンドの妃の負債の問題は差し迫った問題ではない。⁽¹⁰⁾

ミラノ委員会について。キャロライン妃はこの調査にひどくいらだっている。彼女はオーストリア皇帝宛に調査をやめさせるよう要望を送ったとのことであつたが、それはやめた方がよいと忠告した。自分は妃が兄上たちの忠告を聞くのに便利なイギリス国内かブリュッセルに移った方がよいと提案したが、使者をそちらに遣わす以上には動く気はない。妃はミラノ委員会がデュモンを証人に引き出したことにひどく憤っている。妃はデュモンの証言をもっとも気にしており、憤懣やるかたない様子である。妃によればデュモンは「大変な淫婦であり、その性格はよく知られているので、誰もその証言を信用しないだろう」と語っている。ここにいる妹のブロンに姉を連れくるよう言っているが、デュモンは来ようとしな⁽¹¹⁾い。

キャロラインの今後について。シャールロットが急逝するずっと前から彼女は二度と帰国しないと決めていたが、いまその決心が固まっ

た。妃は王妃になる野心はないと語り、もし親しい義弟のヨーク公が即位するようなことがあれば、彼に敬意を表するためイギリスに行つてみたい、とのことである。何よりも平穩に暮らすことを望んでいる。妃はここでもとても幸せそうにみえる。「明白な証拠はまったくないが、あらゆる点から見て二人〔妃とペルガミ〕は夫と妻であるかのようにみえる」。バロンの部屋は妃の部屋に近い。見たところ誰の目にも明らかのように見えるが、彼女の反逆罪を証拠立てるのは難しいだろう。だが状況証拠が洗いざらい述べられたならば、彼女は破滅の底に落ちるだろう。国王は妃を離縁し、彼女が望んだとしても、王妃の座には就かせないだろう。したがって妃の今後の生き方として、年五万ポンドの年金を生涯確保し、王妃の地位には就かず公式に別居する、というような取り決めに結ぶことが考えられる。ジェイムズはこのような主旨を述べ、キャロラインが頼りにしている有能な法律家、兄ヘンリ・ブルームのアドヴァイスを求めている。⁽¹²⁾

事実、兄ヘンリはその趣旨を、一 キャロラインは離婚ではなく公式に別居することに同意する、二 今後王妃に就く権利は放棄しコーンウォール公爵夫人というような肩書きを用いる、三 妃の年金は生涯保証される、という三項目にまとめ、六月一日ハッチンソン卿を通して摂政殿下に提案したが、殿下は公式な離婚を要求し受け入れなかった。⁽¹³⁾

ミラノ委員会の報告が提出され、離婚を押し進めようとする摂政の意向がブルームから伝えられた一九年七月以降、キャロラインは落ちてはなくなった。ジェイムズの報告とは異なり、彼女の内心には王妃の地位への未練が、あるいは離縁され代わりの女性が王妃の座につく

ことへの懸念が渦巻いていたに違いない。八月には馬具などを注文し、キャロラインがペーザロを離れる準備をしているという、数週間前に同地を訪れた旅人によるニュースが報ぜられた。⁽¹¹⁾ またケンジントン・パレスに住んでいる執事シカード宛に、妃が目下ペーザロからイギリスへ向っているので、セント・レガー氏にカレーまで来てほしい、またガース嬢とセント・レガー夫人にはドーヴァーでお会いしたいので伝えてほしい、さらにケンジントン・パレスに住めるよう手配してほしい、という手紙が届いた、と半信半疑に報じられた。⁽¹²⁾

この時期のキャロラインの動きはブルームら少数の関係者にしか知られておらず、記者にとっては謎と思われたが、彼女は確かにオルディ公爵夫人の名でパスポートを取得し、八月には侍従たちとともに密かにペーザロを離れ、ボローニアを経由してリヨンに向かっていた。

マルセイユ発一二月二六日付けの妃の手紙は次のように述べる。五年もの長い間親しいイギリスを留守にしているが、イギリスの人々の私に対する変わらぬ親愛の気持ちが伝わってきて、幸せな気分浸っている。「イギリスにいる私に対する中傷者や敵たちは、またもや、スパイや悪い行為のため私の邸から追放された多くの元召使いを使つて、ミラノで内密の調査を始めている」。クックらは私の私生活のすべてを調べてきた。またも内密の調査を始めるという情報はすでに昨年四月に私の法律顧問ブルームから知らされ、そのとき私はロンドンに行こうと思ったが、彼は私に自制を促し、まずフランスで会いたいとの意向であった。そのためリヨンにきて、同地で数週間待機したが、リヨンは自分には寒過ぎ、冬期の住居を求めてマルセイユに移っている。しかしいつ彼と会えるかわからない。……わが敬愛する国王

「ジョージ三世」の健康が悪化していると聞きとても衝撃を受けている。……イギリスとイタリアでの負債をすべて支払い終えて喜んでい

ることをお伝えしたい、と。⁽¹³⁾ 彼女は真剣に帰国を考えていたのである。当初はしばらくリヨンに滞在し、ブルームの到着を待つて今後の身の振り方を相談する計画であった。しかしブルームからリヨンまでは行けないとの連絡があり、パリに出向くことを考えた。だが二〇年一月六日付けの手紙によると、今朝パリの旧友から来信があり、在パリのイギリス大使は私に対して敬意を払うことはできないと主張し、パリの政府も妃に住居を提供できないのではないかと述べたのである。フランスの現国王は悲惨な亡命中には亡き父ブラウンシュヴァイク公に暖かく迎え入れられたのに。このような国には長く滞在できないので、一月二〇日にはマルセイユを発つて海路イタリアへ帰る、と書かれていた。⁽¹⁴⁾

マルセイユを発つた彼女はサヴォナ、ジェノヴァをへてリヴォルノ（英名レグホーン）で上陸し、ピサ經由ローマに向かった。リヴォルノに到着して、ジョージ三世の逝去（一月二九日）を伝えるブルームの手紙を携えた執事シカードに出会った。彼女は「シカード氏と出会ったとき、私がどれほど驚いたかあなたにはおわかりにならないでしょう」とローマ発二月二三日付けの親友宛の手紙に書いた。⁽¹⁵⁾ 夫の摂政殿下はジョージ四世として即位したので、彼女は当然ながら王妃の地位についたはずであったが、イギリス政府からの公式な連絡はいっさいなかった。ブルームは、イギリスに帰国する前にブリュッセルでカレーで相談したいという意向を伝えてきたが、キャロラインは長い旅行の後なのでしばしローマで休息したい、その後できれば海路でイギ

リスに帰りたい、と認めた返信をシカードに託し、さらに帰国後はグリーン・パークの故シャーロット王妃の住居クイーンズ・パレスに住みたいので、手配するようブルームに要求した。⁽¹⁰⁾

しかし問題はこのキャロラインの「王妃」という称号にあった。イギリス政府はこの問題で諸国の政府に、王妃の称号を認めるという通知をいっさい出そうとしなかった。それどころか、国王と政府はキャロラインから王妃の地位を剝奪するため、国教会の祈禱書から彼女の名前を削除する作業を進めていた。カンタベリ大主教サトンはこの国王の要請に反対であったが、ミラノ委員会後にはリヴァプール内閣はその方針をやむなしと考えるようになり、二〇年二月一日、内閣は祈禱書からの削除を公式に認めたのである。ローマに着いたキャロラインは教皇庁に対し、夫が即位したので自分を王妃として遇するよう要求したが、枢機卿はイギリス政府とハノーヴァ当局から公的な通知を受けたならば王妃として敬意をもつて遇したいと答えた。⁽¹¹⁾ キャロラインは三月二日には「イギリスへ飛んでいきたい」と親しい友人宛に書いたが、四日後には、ローマの教会で前国王の逝去以降、若い司祭がイギリス人に向かって、ジョージ四世と王妃キャロラインのために祈りの言葉を語っていることを書き送った。⁽¹²⁾

王妃の名前を祈禱書から削除するという前代未聞の問題は、もとより庶民院で論議を巻き起こし、この措置を不当とする意見が多数を占めた。しかし国王はカースルリー外相を通じて密偵オムプテダーに指示していたとおり、祈禱書からの削除と王妃の称号を認めないことは、まったく譲歩しようとしなかった。国王側がいくらかの譲歩を見せ最後の示した案は、キャロラインが国外で暮らすならば、王妃の

称号並びに王族にかかわる称号は認めないが離縁などの措置はとらない、また生涯にわたって年額五万ポンドの年金を保証する、しかしもし帰国するならば、不義密通の罪で妃に対する刑罰法案を通過させ、離婚を断行する、というものであった。⁽¹³⁾

四月にベルガミ、ヴァッサリ伯爵、オルデイ公爵夫人、マリエツテ・ブロンらを連れてペーザロを発ち、イギリスへの帰国の旅についたキャロラインは、ブルームからカレーに近いセント・メールで待つよう連絡を受けた。六月四日、同地で右のような国王側の提案をまとめたハッチンスン卿の文書を、卿に同行したブルームから見せられたとき、キャロラインは興奮し「このような提案を聞きいれることはまったくできない」との文を認め、ハッチンスン卿に届けさせ、直ちに帰国することを決断した。ベルガミ、ヴァッサリとはここで別れ、彼女は支持者のロンドン市長ウッドやアン・ハミルトンに伴われ、直ちにカレーに向かった。⁽¹⁴⁾ 王妃がドーヴァーに着いた翌六月五日以来、圧倒的多数の国民、民衆がキャロライン側につき、各地で王妃の帰国を祝賀する賑々しい示威行動が繰り広げられた。この六月から貴族院の「裁判」が行われた十一月にかけて、「キャロライン王妃事件」は「大衆の感情を徹底して興奮させ」、商売のことも個人の楽しみさえも忘れさせ、「食事さえも二の次」になるほど国民大衆を熱中させたのである。⁽¹⁵⁾

むすび

キャロライン妃は一八一四年八月にイギリスを発ち、実家ブラウンシュヴァイクに向けさらにイタリアに向けて出国した。それは妃の側

からの娘シャーロットとの面会を厳しく制限し、〇七年六月四日のジョージ三世の誕生祝賀会を最後に、彼女との面会をいっさい拒否してきた夫ジョージとの間の「平和を取り戻す」ための、他方、皇太子妃としての誇りを傷つけられた数々の「不名誉と屈辱」と「虐げられた」境遇からの解放を求める旅出であった。以来五年半を超えた大陸旅行、パレスティナ方面への冒険旅行とイタリア生活において、彼女は確かにそれまでの鬱屈した生活から解放され、生気を取り戻すことができた。しかし自由と解放をかち得たその大陸旅行がまた、彼女の悲劇を決定的なものにした。夫の指図による密偵が彼女の行く先々を追いかけて、召抱えた近習、従者を買収して彼女をおとしめる情報をかき集め、侍従として信頼し頼りにするようになった元イタリア軍人ベルガミとの「不義」の物語がつくり出された。

確かに彼女の冒険旅行と大陸生活を考えてみると、皇太子妃としては、常軌を逸した途方もないと思われることが少なかつただろう。彼女とベルガミとの間の真実は、本人が真相を明かさなにかぎり不明というほかないが、ジェイムズ・ブルームが述べたように状況証拠は確かに揃っていた。彼女は一般人とも気さくに付き合い、気取らない闊達な性格の持ち主であったし、虐げられた状態が続くなかで夫に従順に従う女性ではなくなっていた。何人もの著者や筆者が、彼女について「御しがない」(unruly)とか、「おてんば娘」(hoysen)、あるいは「分別のない」(indiscretion)という批判的評語を用いたのも故なしとしない。⁽¹¹⁾ 彼女は皇太子妃としては確かにいくつもの欠点の持ち主であった。

しかしキャロラインは一七九五年四月に嫁いできた当初から、「御

しがない」「分別のない」「おてんば娘」であったのだろうか。彼女の悲劇はその結婚とともに始まった。従兄弟である夫ジョージは、その九年以上前の八五年一月一日、二三歳で司祭の立ち合いのもと六歳年長のカトリック教徒フィッツハーバート夫人(未亡人)と密かに挙式しており、⁽¹²⁾ 以来「最愛の妻」と呼んで同棲していた。だがこの秘密の結婚は公式にはまったく認められないものであった。なぜなら、一七七二年の王室結婚法では二五歳以下の王族の結婚には国王の許可が必要と定めており、また名誉革命以来カトリック教徒はその配偶者から排除されていたからである。皇太子は当時ほかにジャージー公爵夫人とも親密な間柄にあり、嫁いできたキャロラインを悩ませた。ジョージがキャロラインとの結婚を決めた理由は、正式の妃を得て世継ぎを得ること、それにより積もりつもった彼の膨大な借金を議会が負担してくれることを見込んだからであった。結婚の翌年に九カ月でシャーロット妃が生まれた数日後、夫は酩酊して長文の遺書を書き、その一節で「皇太子妃といわれている女性に一シリングだけ遺す、フィッツハーバートにわが全財産を贈与する」と認めた。⁽¹³⁾

より衝撃的なのは、婚約が決まった九四年秋にジョージがキャロラインに宛てた手紙である。それは以下のように述べていた。もうあなたは私のところに嫁入りして決まった、自分はこの結婚を押し進める動かしがたい力に従わざるを得ないが、それは私を絶望へ落とし込む。率直に申し上げるが、あなたはこの縁談をまだ断ることができるので、この婚約を破棄してほしい。私はあなたを愛せないし、幸せにすることもできない、私は他の女性を愛しているのです。

「あなたが王位を継げる世継ぎを生んでくれたら、私は直ちにあなた

を棄てます。公の場では二度とあなたと会わないつもりです。そして私は愛している女性のところに行き一緒に暮らします。お嬢さん、これが私の最終的な取り消せない結論です⁽¹¹⁾。このような身勝手な「決定」に対し、キャロラインは「私の義務はよくわきまえていますし、私に課せられた掟を破る力もその願望もありません。ですから、私に指令する権限をもっておられる方の希望に従うことに決めました。同時にあなた様が言われている恐ろしい結果にも従います。しかしそのような苦痛を与えられた人の心中をお察しになりますれば、あなた様もそのような残酷な取り扱い方に対し、おそらく良心の呵責を感じられることでしょう」と返信を書いた⁽¹²⁾。二人の結婚生活はこのジョージの手紙通りにそれを実践する形で展開したことになります。キャロラインの悲劇は真に不自然な婚約のときから始まっていたのである。ときを下って一八三〇年六月、キャロラインよりほぼ九年遅れてジョージ四世が他界したとき、『タイムズ』は葬儀の後三週間の状況をみて冷静な立場から、快楽に明け暮れたジョージを次のように評した。「このたび他界した国王ほど、同胞たちから哀悼されなかった人はいまだかつてなかった」⁽¹³⁾。

本稿で検証したように、キャロラインの「不義」の物語は元々と言えば密偵オムプテダ男爵らが創作した虚構であり、男爵やシラノ委員会の前でキャロライン妃に背いて妃の「不義」をまことしやかに証言した主要な証人たちは、悪事を犯して妃から解雇された者たちか、または金銭で買収された卑しい者たちであった。貴族院の「裁判」においてブルームの反対尋問がそのかなりの部分を明らかにしたが、彼らの証言は虚構に富み、偽証に近いものであった。母の噂に悩んでい

たシャーロット妃は一八一七年のある日、夫レオポルドに次のように語った。「母は悪いのです。しかしもし父がこうまでひどく悪い仕打ちをしなかったならば、彼女もこれほど悪くはならなかったでしょう⁽¹⁴⁾」と。この言葉はまさに核心をいっている。

註

- (1) *The Times*, 17 May 1817, p. 4. Lewis Melville, *An Injured Queen, Caroline of Brunswick*, 2 vols. London, 1912, vol. 2, pp. 312-14.
- (2) Lord Liverpool to the Princess of Wales, 28 July 1814, Melville, vol. 2, pp. 314-16. Lady Charlotte Bury, *Diary of A Lady-in-Waiting*, ed. by A. Francis Steuart, 2 vols, London, 1908, vol. 1, pp. 404-05.
- (3) The Princess of Wales to Lady Charlotte Campbell, 29 July 1814, L. Melville, *op. cit.*, vol. 2, pp. 320-22.
- (4) *Times*, 10 August 1814, p. 4. Robert Huish, *Memoirs of Her Late Majesty Caroline, Queen of Great Britain*, 2 vols, London, 1821, vol. 1, pp. 580-82.
- (5) *Times*, 17 May 1817, p. 4. Melville, vol. 2, pp. 316-19.
- (6) Samuel Whitbread to the Princess of Wales, 1 Aug. 1814, Melville, vol. 2, p. 320. ホーナーンハムは「五年七月に自殺した」。
- (7) *Hansard's Parliamentary Debates* [*Hansard*], vol. 27, June 1814, 1050-53. The Letter of the Queen to the Princess of Wales, 23, 25, 27 May 1814. Melville, vol. 1, pp. 243-44ff.
- (8) A Aspinall, ed., *The Letter of King George IV*, 3 vols, Cambridge, 1938, vol. 2, Jan. 1815—Jan. 1823, p. 278.
- (9) *Hansard*, second series, vol. 2 (1820). 拙稿「キャロライン王妃と貴族院の『裁判』」『史窓』五九号、平成一四年。
- (10) Graziano Paolo Clerici, *A Queen of Indiscretions, The Tragedy of Caroline of Brunswick, Queen of England*, translated by Frederick Chapman, London, 1907 (Italian edition, 1904), Introduction, lxxxvii.

- (11) Lewis Melville, op. cit.
- (12) Sir Edward Parry, *Queen Caroline*, New York, 1930, pp.11-12.
- (13) 既述以外に参照した主要な伝記的著作をあげれば次のとおりである。
Joseph Nightingale, *Memoirs of the Public and Private Life of Queen Caroline*, London, 1820, the Folio Society edition by Christopher Hibbert, London, 1978. Wm. Dodgson Bowman, *The Divorce Case of Queen Caroline, An Account of the Reign of George IV and the King's Relations with other Women*, New York and London, 1930. Howard Coxe, *The Stranger in the House, A Life of Caroline of Brunswick*, New York, 1940. Joanna Richardson, *The Disastrous Marriage*, Jonathan Cape, 1960. Roger Fulford, *The Trial of Queen Caroline*, London, 1967. Lord Russell of Liverpool, *Caroline, the Unhappy Queen*, London, 1967. Thea Holme, *Caroline, A Biography of Caroline of Brunswick*, London, 1979. Alison Plowden, *Caroline and Charlotte, The Regent's Wife and Daughter, 1795-1821*, London, 1989. E. A. Smith, *A Queen on Trial, The Affair of Queen Caroline*, Alan Sutton, 1993. Stephen C. Behrendt, *Royal Mourning and Regency Culture, Elegies and Memorials of Princess Charlotte*, London, 1997.
- 伝記以外の研究については次を参照。拙稿「キャロライン王妃事件をめぐる
べン・カーク・ウィリアムス王立と民衆・世論」『史絶』五五号(二〇〇一年)。
Rohan McWilliam, *Popular Politics in the Nineteenth Century England*, London, 1998。松原俊三訳『十九世紀イギリスの民衆と政治文化—
ホバース・バーク・ヘンリー・修正主義をめぐって』昭和製、二〇〇四年。
- (14) A. Aspinall ed., *The Correspondence of George, Prince of Wales, 1770-1812*, 8 vols., London, 1963-71. ditto., *The Letters of King George IV, 1812-1830*, 3 vols., Cambridge, 1938.
- (15) Flora Fraser, *The Unruly Queen, The Life of Queen Caroline*, London, 1996.
- (16) Nanora Sweet, “‘The Inseparables’: Hemans, Browns and the Milan Commission’, *Forum for Modern Language Studies*, 39-2,

- April 2003, pp.165, 175.
- (17) 三月一日にキャロラインから庶民院議長に宛てられた手紙を議長が読み
上げて以来、ホイットブレッドの支援議員をはじめ、キャロラインに理解
を示す多くの議員の発言が続き、この議会の討議の様子が『タイムズ』に
も報じられ、皇太子妃の「辱けられた」状況が広く国民に浸透するよう
になった。 *Hansard*, vol. 24 (1813), 982-1128, 1131-55, vol. 25 (1813),
113-200ff.
- (18) *Hansard*, vol. 27 (1814), 1048-53.
- (19) The Princess of Wales to George Canning, 3 Aug. 1814, L.
Melville, vol. 2, pp.322-24.
- (20) George Canning to the Princess of Wales, 5 Aug. 1814, Melville,
op. cit., p.324.
- (21) The Princess of Wales to Lady Charlotte Campbell, 7 Aug.
1814, Melville, pp.324-26. Lady C. Bury, *Diary of A Lady-in-
Waiting*, vol. 1, p.270. 後者は本記の1次の収録をよんでいる。
- (22) *The Letters of King George IV*, vol. 2, “Copy of the Queen’s
Narrative, partly from Her M’s dictation”, p.347.
- (23) Melville, vol. 2, pp.327-330.
- (24) Lady C. Bury, vol. 1, pp.274-75.
- (25) Letter to Lady C. Campbell, Melville, vol. 2, pp.330-31, 339-42.
- (26) *Hansard*, second series, vol. 2 (1820), 1111ff, 1230-34.
- (27) *Letters of King George IV*, vol. 2, p.347.
- (28) Ibid., pp.347-48. 註(25)を参照。
- (29) Melville, vol. 2, pp.348-52.
- (30) *The Letters of King George IV*, v. 2, p.348.
- (31) *Hansard*, second series, vol. 2 (1820), 806ff.
- (32) R. Huish, v. 1, pp.594-95.
- (33) Ibid., pp.595-96.
- (34) Pss of Wales to Lady Campbell, février, 1815, Melville, v. 2, pp.
339-42.
- (35) Pss of Wales to Miss Berry, 23 March, 1815, in Clorinde, Mel- 82

- ville, v.2, pp.345-47. Edward Parry, pp.214-15.
- (39) Melville, v.2, pp.348-50, G.P.Clerci, pp.78-79.
- (40) Thea Holme, pp.156-57.
- (41) Royal Archives, Geo. IV, Box 9/1, Report of William Cooke and John Powell, 13 July, 1819, p.5. *Hansard*, vol.2 (1820), 1123-24.
- (42) Royal Archives, Box 9/1, Report of W.Cooke..., p.6. *Hansard*, vol.2 (1820), 1124-25. Clerci, p.78. Melville, vol.2, pp.380-81.
- (43) Royal Archives [RA], Box 9/1, Report of Cooke..., p.6.
- (44) F.Fraser, pp.276-77.
- (45) *Times*, 21 Aug., 1815, p.3. Clerci, p.83.
- (46) 'くそかゝり家といふ所の証言はたゞ参照。' RA, Geo. IV, Box 13, Evidence under the Second Head, no.1. Box 13/(1)54.
- (47) *Hansard*, vol.2 (1820), 1266ff.
- (48) *Letters of King Geo. IV*, v.2, p.349. Clerci, p.93.
- (49) Huish, v.1, pp.602, 606.
- (50) T.Holme, pp.164, 187.
- (51) Fraser, pp.283-84.
- (52) RA, Geo. IV, Box 9/1, Report of Cooke..., p.13. Huish, v.1, p.617. Holme, p.166.
- (53) *Times*, 15 Aug., 1816, p.3. *Letters of King Geo. IV*, vol.2, p.350. Huish, v.1, pp.618-26. Melville, v.2, p.356, Fraser, pp.284-85.
- (54) Huish, v.1, pp.626-30.
- (55) *Letters of King Geo. IV*, v.2, p.350. Huish, v.1, pp.631-32.
- (56) Huish, v.1, pp.633-36ff, 345.
- (57) *Hansard*, vol.2 (1820), 889-900, 915-23.
- (58) *Letters of King Geo. IV*, v.2, p.350.
- (59) Huish, v.1, p.646.
- (60) Huish, v.1, pp.655-58.
- (61) RA, Geo. IV, Box 9/1, Report of Cooke and Powell, pp.4-6.
- (62) Huish, v.1, pp.672-76. *Times*, 29 April, 1817, p.3.

- (㉔) Lord Castlereagh to Lord Stewart, Most Private and Secret, 21 Jan. 1816, E. Parry, Appendix I, p. 329 ff.
- (㉕) Huish, v.1, pp.679-80.
- (㉖) *Letters of King Geo. IV*, v.2, p.272.
- (㉗) RA, Georgian Additional, MSS, 21/102, 27, 10 May, 1819.
- (㉘) Lady Anne Hamilton, *Secret History of the Court of England, from the Accession of George the Third to the Death of George the Fourth*, London, 1832, pp.117-19. Parry, pp.211-15.
- (㉙) Parry, pp.213-19.
- (㉚) RA, Geo. IV, Box 9/3, 3)a) Vice Chancellor's Original Report, p.8.
- (㉛) *Times*, 17 May, 1817, p.4. *Letters of King Geo. IV*, v.2, p.349. Huish, v.1, pp.659-60. Clerci, p.84.
- (㉜) ㉜(㉜) ㉜(㉜) Parry, Appendix I, pp.329-31.
- (㉝) Stewart to Castlereagh, Private and Most Secret, Milan, 28 Feb. 1816, Parry, Appendix I, pp.331-38.
- (㉞) RA, Geo. IV, Box 13/53-no.X. *Letters of King Geo. IV*, v.2, p.350. Clerci, pp.101-06.
- (㉟) M. Crede to the Chevalier Tomassia, *Times*, 7 Oct., 1820, p.4. Huish, v.1, pp.661-62. Melville, v.2, pp.386-87.
- (㊱) RA, Geo. IV, Box 9/3, pp.4-6.
- (㊲) *Times*, 26 March, 1817, p.3.
- (㊳) Ibid. and 31 March, 1817, p.3.
- (㊴) Ibid., 4 April, 1817, p.3.
- (㊵) Ibid., 25 Sept. 1820, p.3.
- (㊶) RA, Geo. IV, Box 9/3, pp.6-7.
- (㊷) *Hansard*, vol.2 (1820), 969-73, 975 ff.
- (㊸) RA, Geo. IV, Box 9/3, p.7.
- (㊹) "Journey of an English Traveller, or remarkable Events and Anecdotes of the Princess of Wales from 1814 to 1816", *Times*, 20 May, 1817, p.3.

- (81) *Times*, 7 Nov. 1817. 掲載「シヤールロケット王女の夭折 その追悼・顕彰
と民衆—シヤールロケット王妃事件研究」京都女子大学大学院文学研究紀要
『史学雑誌』11号、1100三年三月。
- (82) Holme, pp.184-85. *Letters of King Geo. IV*, v.2, p.282.
- (83) RA, Geo. IV Additional, MSS 21/102, 24 C.
- (84) RA, Geo. IV, Box 13/53, no.IX. L.C.Bury, v.2, p.146. シヤール
ロケットの夭折とその追悼 cf. Melville, v.2, pp.365-66.
- (85) Pss of Wales to a Friend, [1818], Melville, v.2, pp.408-09.
- (86) *The Examiner*, 9 Nov.1817. *Black Dwarf*, 12 Nov.1817. Samuel
Bamford, *The Autobiography of Samuel Bamford*, 2 vols., 1839-
1841, 6th edn 1967, pp.29-39. 前掲掲載「シヤールロケット王女の夭折」
- (87) RA, Geo. IV, Box 23/3-51.
- (88) RA, Geo.IV, Box 23/3-51. *Letters of King Geo. IV*, v.2, pp.252-
53. Fraser, pp.304-05.
- (89) Pss of Wales to a Friend, 26 Dec.1819, Melville, v.2, pp.396-97.
Huish, v.2, p.12.
- (90) RA, Geo. IV, Box 9/1, B-C. *Hansard*, second series, 1820, vol.1
~2.
- (91) RA, Geo. IV, Box 13/57, A List of some of the people examined
as far as we know. G.Sacchi & L.Dumont.
- (92) RA, Geo. IV, Box 13/2, 51, Letters relating Mr.Henry.
- (93) Fraser, pp.401, 428-30.
- (94) RA, Geo. IV, Box 13, Evidence under the Third Head, no.V,
83-86, Pesaro, 29 Sept. 1820.
- (95) RA, Geo. IV, Box 23/69, G.Sacchi to Brown, 16 Dec. 1818,
Brown to Sacchi, 29 Dec. 1818.
- (96) RA, Geo. IV, Box 9/1, Report of W.Cooke and J.Powell, pp.
2-4, App. (82); Box 9/2, Bundles of Lists and examinations of
witnesses, (82) Dumont.
- (97) RA, Geo. IV, Box 23/10, Expenses in Milan Commission.
- (98) Demont to Bron, 8 Feb. 1818, RA, Geo. IV, Box 13/4-57. *Hansard*

- sec. ser., v.2 (1820), 1221-32. L.Demont, *Journal of the Visit of
the Princess of Wales to Tunis, Greece, and Palestine*, 1818.
- (99) *Times*, 31 Oct. & 3 Nov.1820, p.3. Melville, v.2, pp.390-92. RA,
Geo. IV, Box 13, Evidence under the Fourth Head, XXXVIII.
- (100) *Letters of King Geo. IV*, v.2, pp.280-81.
- (101) Ibid., Melville, v.2, pp.478-79.
- (102) Ibid., pp.480-81, Holme, p.199.
- (103) *Hansard*, sec. ser., v.2, 869-70. cf. Marcus Wood, *Radical Satire
and Print Culture, 1790-1822*, Oxford, 1994, pp.150-54.
- (104) Ibid., 804.
- (105) *Letters of King Geo. IV*, v.2, p.860. *Hansard*, sec. ser. v.2, 933
-37.
- (106) *Hansard*, sec. ser., v.2, 1252-53.
- (107) RA, Geo. IV, Box 9/1, Report of Cooke and Powell, pp.1-25.
- (108) James Brougham to Henry Brougham, March, 1819, *Letters of
King Geo. IV*, v.2, pp.272-85.
- (109) Ibid., pp.272-76, 277-78.
- (110) Ibid., pp.278-79.
- (111) Ibid., pp.280-85.
- (112) Ibid., p.284.
- (113) *Times*, 31 July, 1819, p.2.
- (114) *Times*, 13 Aug. 1819, p.2.
- (115) Huish, v.2, pp.11-13. Melville, v.2, pp.394-96. *Times*, 24 July,
1819, p.3.
- (116) Huish, v.2, pp.15-16. Melville, v.2, pp.396-97.
- (117) Caroline to a Friend, 23 Feb., 1820, Melville, v.2, p.398.
- (118) Caroline to Gell, 3 March, 1820, RA, Geo. IV, Add. MSS, 21/
102, no.36. Melville, v.2, pp.398-99, 401.
- (119) Caroline to Gell, 29 March, 1820, RA, Geo. IV, Add. MSS, 21/
102, no.35. Huish, v.2, pp.16-18. Melville, v.2, pp.400-01.
- (120) Pss of Wales to a Friend, 2,6 March, 1820, Melville, v.2, pp. 72

401-02.

- (11) この方針の出発点については註(8)(8)の史料を参照。Huish, v.2, pp.58-60.
- (12) Huish, v.2, pp.60-62ff.
- (13) William Hazlitt, "Common Places", no.23, 1823, in *The Complete Works of William Hazlitt*, ed. by A.R. Waller and Arnold Glover, 12 vols, London, 1904, vol.2 p.554.
- (14) "unruly" by F.Fraser, "indiscretion" by G.P.Clerici and others, "hoyden" by *The Companion to British History*, by Charles Arnold-Baker, 2nd. edn., London, 2001.
- (15) *The Correspondence of George, Prince of Wales*, v.1, a facsimile in front page.
- (16) Ibid., v.3, p.132.
- (17) Copy of a letter written to the Princess Caroline of Brunswick by George, Prince of Wales, in Lady Ann Hamilton, *Secret History of the Court of England*, p.44.
- (18) Copy of the reply to George, Prince of Wales from Caroline, Princess of Brunswick, in Lady Ann Hamilton, p.47.
- (19) *Times*, 16 July, 1830, p.3. E.A.Smith, *George IV*, Yale U.P., 1990, p.273.
- (20) Dormer Creston, *The Regent and His Daughter*, London, 1932, p.253. Christopher Hibbert, *George IV, Regent and King*, 1811-1830, London, 1973 p.96.